

2025年8月6日

別府北浜ホテル キックオフmtg～文字起こし

00:00:00

安部和音: よいしょ。

竹林ユウマ: あ、お待たせしました。あ、さ野さんまだか。

安部和音: ささん、ちょっと待って。いやいや、ダーツ見えてる。ダーツ見えてるって。

竹林ユウマ: いや、あのね、うち、うちいや、置いてるんよ、ダーツを。

安部和音: えぐいって。うん。

竹林ユウマ: これどう、これどうやって背景消すんだっけ？あ、これか。

安部和音: いや、その本棚にダーツ出てくんの無理なんだけど。うん。

竹林ユウマ: お願いしえ、一時期めっちゃダーツはまってて。

安部和音: へえ。

竹林ユウマ: そう。あの瞑想的な感じでやってたんや。

安部和音: ああ。

竹林ユウマ: そ、めっちゃ集中力使うからさ。

安部和音: ああ。ま、確かに。

竹林ユウマ: 瞬発的な集中力が。

安部和音: はいはいはいはい。

竹林ユウマ: そう。

安部和音: おもろ。

竹林ユウマ: それを鍛えるためにね、やってたんだよ。

安部和音: いや、さっきの方が面白いよ。本棚に浮かぶダースの方宇宙とかないの？ダーツだ。

00:09:43

竹林ユウマ: これじゃね。あ、これ普通。

安部和音: ダツっぽいもん。え、あ、出てこねえんだ。

竹林ユウマ: あ、出てこねえな。なんか俺のスタンドみたいになって。

安部和音: マジやばいんだけど。あ、えっと、あれを共有しよう。一応まとめてきたんだけど。あ、それ入れなきゃな。ま、うん。エリアの名前だね。

竹林ユウマ: はい。はい。はい。北浜っていうのがエリアの名前なの？うん。

安部和音: えっとごタ焼き丸ノーションって Google マップ入れたっけ？あ、来た。

竹林ユウマ: うん。うん。行けるはず。

安部和音: えっと、あ、お世話になります。

竹林ユウマ: お疲れ様です。お久しぶりです。

Kazuya Sano: してます。

安部和音: よろしく願います。ちょっとお待ちください。

Kazuya Sano: どうもどうも。よろしく願います。

竹林ユウマ: 願います。

安部和音: あふ。あ、そうだ。

竹林ユウマ: お久しぶりです。もう

Kazuya Sano: 久しぶりです。

竹林ユウマ: 4年ぶりとかになるんすかね。うん。そうですね。その野さん今あれですか？札幌にいらっしゃるんですか？あ、本当ですか？なんかストーリーも見ててお子さんが生まれた。あ、そうなん。はい。おめでとうございます。

00:11:25

Kazuya Sano: 確かに3年ぐらいかな。で、2022とかだった気がするね。今札幌です。そうなんですよ。生まれました。そう、そう、そう。

安部和音: 2人目おめでとうございます。すごいね。

Kazuya Sano: 2人目生まれました。ありがとうございます。安君はストレスで1人で生まれてたらしいけど。

竹林ユウマ: うん。

安部和音: あ、なんて言いました？あ、そうですね。いや、そうです。えっと、ちょっと待ってくださいね。ごめんなさい。えっと、今、あ、ごめん。林君、もう1回言われるさんに貼ってこない？ちょっと概要まとめたやつがあって、あとは野さんちょっとノイキャン結構がつつり聞ける。聞いててちょっと聞こえづらかったなと思。あ、分かりました。あ、じゃあじゃあそういうことです。ました。

竹林ユウマ: うん。あ、じゃあ一応 LINE に送りますね。

Kazuya Sano: 安くはストレスで1人ばれてたらしいけど。ああ、なんかちょっとね、音うるさめかも。背景の音が。

安部和音: えっと、モーションに場所を足さないといけません。で、画面共有。よし。

00:13:03

安部和音: ちょっと軽くまとめてきたんですけど、これ見えてますか？はい、ます。

竹林ユウマ: はい。見えてます。

Kazuya Sano: あ、ございます。願います。

安部和音: えっと、ば、まずまず場所なんですけど、ホテルの場所なんですけど、あ、場所、

これ今見えてないすよね。画面全体に画面全体はい。

Kazuya Sano: 見えてない。

安部和音: 場所が、えっと、別駅がここになるんですけど、ま、もうこれ、これぐらいの場所ですね。えっと、こっからここまでで

竹林ユウマ: うん。

安部和音: 56分は歩きますね。

Kazuya Sano: でも全然近い

安部和音: っていう近いですね。駅前で、ま、あの、これが立ってるんですけど、ストリートビューで見た方が分かりやすいかな？いや、持ってないすね。

Kazuya Sano: これ元々持ってたの？このビ

安部和音: あの、経緯がちょっとあるので、それもお話しようかなと思うんですけど。このラットってバーが残ってます。

竹林ユウマ: うん。

安部和音: あの、それでこれ、これも壊します。

竹林ユウマ: うん。ふ。

安部和音: で、これも壊します。で、上から見たらもう少し分かりづらい、分かりやすいんですけど、こ、こういう形に壊します。

00:14:38

安部和音: これだけ残り、残るんですけど。で、ま、これがホテルの、ま、場所になるっていう感じで、えっと、経緯としては金融機関さん、禁煙機関さんの紹介で原口さんっていう人があの、すげえいい土地を抑えたんで、無人ホテルを企画できる運営者さん探してます。出資者探してますっていうのが、ま、発端になります。

Kazuya Sano: え

竹林ユウマ: うん。

安部和音: で、えっと、原口さんっていう人が、ま、どんな人かって言うと、えっと、元水ハウスで、で、グランドベースってご存知かな？ど、どうですかね？グランドベースって結構石ハウスがやってるホテルになるんですけど、で、あの、それも全部あの、原口さんが、ま、なんとし

竹林ユウマ: うん。

安部和音: てたっていう方で、石水ハウスのホテルプロジェクトの、ま、責任者みたいな方ですね。で、えっと、今リビングデザインっていうあの建築会社に所属してて、で、今回のホテルはリビングデザインが立ってます。えっと、で、あの、今回が、えっと、石水ハウスから独立、独立というか、ま、あの、取締役まり役でリビングデザインに入ってるんですけど、ま

竹林ユウマ: うん。

安部和音: 、そういう形になってから初めての無人ホテルの案件っていうのでうちがやります。

00:15:59

安部和音: で、そうですね。で、リビングデザインが、えっと、建築会社でソラマドっていうブランドの方がちょっと有名でソラマドっていうのがなんかこ中になんか吹き抜けの中庭を作りますみたいな結構建築会社のコンセプトがあってそれを空って多分言ってるのかなと。

ま、結構綺麗な住宅を作る注文住宅の会社ですよ。

竹林ユウマ: うん。

安部和音: で、元々大元が、えっと、RC のマンションとかホテルとか立ち、立てるこの裏松建設っていう会社があって、その子会社なんですよ。で、今回はあの RC の4回建てで立てる予定だったんですけど、あのコンクリートがあまりに材料費が高騰してしまって2億5000万ぐらいこう見積もりと違う金額が

竹林ユウマ: はい。

安部和音: あと第2回目の見積もりできたのでも木造にするってなってじゃあ木造だったらまああのリビングデザインの空窓の方でいいねっていうのでま今回ソラマドリビングデザインさんが作ります。で、えっと、内装デザインでアトリエシュメルさんっていうのが入ってて、この方が、えっと、この方々が、えっと、インテリア、インテリアだったり、内装のクロスの柄だったりとかもほとんど決めてくれてます。で、あの、その会社が石水ハウスの大分市の内装設計ともう全部担当してるっていう会社さんになります。

00:17:17

竹林ユウマ: うん

安部和音: で、えっと、和モダンっていうのとコ壁っていうの、あの、ちょ、ちょっとお2人に、ま、あの、それぞれお話ししたと思うんですけど、ま、なんかそういうコンセプトもらってますっていうのは、それはアトリシュメルさんが、えっと、提案してきてるものになります。

竹林ユウマ: 。

安部和音: で、設計士さん、あの、原口さんも一応、あの、建築士さんなんですけど、まあ、なんかがつつり建築事務、建築設計事務所が入ってて、それが岡田さんっていうところが入ってます。で、この辺から僕ら関わってなくて結構ブラックボックスになってって、あの、原口さんの後ろになんか大人の人がなんか56人いるんですけど、その方だったら喋れてないですね。

竹林ユウマ: うん。

安部和音: で、リクリエさんっていうのが運営代行の業者で、えっと、ま、サースだったりコンサル、ま、あの、無人とか民泊とか、あの、ホテルのコンサルで、えっと、運営代行ですね。カスタマサポートと、えっと、PMS、あの、サイトコントロール竹橋も分かるかな？えっと、JAとか Booking . com とかの金額をなんか毎週とか毎日とか

竹林ユウマ: いや、分かるね。うん。うん。ああ。はい。はい。はい。はい。はい。はい。はい。はい。はい。はい。はい。

00:18:29

安部和音: 変えたりとかして、で、なんか予約管理したりとかで、そこでカスタマーサポートしたりとかっていうなんか、ま、そういう業務毎日の業務をやるのがこのリクリエさんでいう感じで、で、これはあの、石星ハウスのグランドベース全部やってて、あとファブホテルっていうのがカス関キャピタルがやってるホテルがあるんですけど、ま、それも全部やってて、で、最近リクレさんが買収されたんですよ、霞ヶキャピタルに。で、そのせいで割とうちにやる気がないんじゃないかなっていううちの方にですね、ま、コンサルだとか設計の部分でっていうので、ま、お2人をアサインしてます。

竹林ユウマ: うん。うん。

安部和音: そんな、ま、ステ、あの、ステガホルダー的には、ま、この辺プラス、ま、原口さんの後ろになんかこの岡田さんだとかなんかちょっとよくわからないけど大人が色々入っててっていうのを、ま、まとめ上げる。

竹林ユウマ: うん。

安部和音: あの、なんか、なんかその人たちがいい、色々ステークホルダーがいるんだけど、なんかうまくまとまってない感があるので、ま、言語化であったりとかやっぱりそういうソフトウェアの部分をちょっとまとめてあげてまた振り役ステあのステートメントみたいな感じにできればと思ってちょっとお願いしたいって感じですね。

00:19:40

安部和音: ですね。

竹林ユウマ: うん。

安部和音: で、ま、今カリデなんですけど、ホテルの名前はちょっとアムアムとか、ま、大文字でもいいんですけど、ちょっと分からないんですけど、ま、こんな感じで考えてます。で、コンセプト的には、あ、アムとか結ぶとかオールとかなんかこういったものの日本的よ、ま、和モダっていうことなんで、ま、こう最構築みたいな感じで、ま、ちょっと考えてるって感じですね。ですかね。ま、大まかにはコンセプトとしてはそんな感じですね。ま、お2人にお願いしたいのはもう基本的には、あの、やっぱソフト面から宿泊体験価値っていうのを高めるっていうのかなりできることかなと思っていて、今のステックホルダーの中にはそれを考えてる方々ってのがいない状態で、ま、できるとしたらリクリエさんになると思うんですけど、リクリエさんがゴタゴタしてるので、もうそこはもううちが抱えますっていうことで、あの、予算を、ま、とりあえず100万円くださいっていうので原口さんに言って、原口さんが書き集めてきて、来てくれたっていう感じになります。すいません。ちょっと予算少ないんですけど、で、えっと、あの、最終的な目的僕なんですけど、今並行してる再販事業ってのがあるんですよ。

00:21:03

安部和音: で、これがめちゃくちゃかっこいい感じになりそうなので、リッツハウスを結構底上げしてくれるかなっていう授業になりそうかなと思ってます。で、あの、ホテルも、あの、そういった授業に予算的にはもうかなりかけてデザインホテルって形にするので、ま、リッツハウスの資であったり B だったりブランドを高めるような授業に最終的にはしたいっていうのが、ま、最終的な目的としてあります。ですね。

Kazuya Sano: 儲力。

安部和音: うん。

竹林ユウマ: なるほど。

安部和音: はい。ま、結果儲かるかなっていうのがありますね。

Kazuya Sano: Så

安部和音: あとは、あ、こ、どうで、どうですか？ここまで結構喋れる内容あるかなと思うんですけど。はい。ここまですでどうですかね？うん。

竹林ユウマ: これってもうすでにえっとどこだっけ？え、アトリエシュメールがもう内装のコンセプトを出してきて、なんかそっから逆算してソフト面を考えていくイジなんかうん。

安部和音: うん。うん。はい。はい。はい。そう。えっと、うん。

竹林ユウマ: じゃ、こっちで01で何かブランドコンセプト決めてとかではなくって感じか。

00:22:15

Kazuya Sano: このこれだよね。

安部和音: ふん。ふん。ふん。あ、そうですね。うん。あの、基本そうですね。こ、これ、これが、これがシュメールさんが出してきてるやつですね。

竹林ユウマ: うーん。

安部和音: この建築図面内装資料ってやつで、あ、すいません。これ、これ名前ちょっと適当やったんですけど、0707。えっと、俺らが作ってるパースになります。

竹林ユウマ: うん。ふん。うん。え、これかさん作ったの？あ、パースね。

安部和音: これどれ？あ、パースの方はね。

竹林ユウマ: ああ。

安部和音: うん。こう、こっち、こっちを、ま、この図面から拾ってで、あの、色々資料から拾って作ったのがちょっと待って。

竹林ユウマ: え、そ、これ何で作ったの？これ。

Kazuya Sano: げめっ

安部和音: これも D 5レンダーっていうなんかシンガポールのソフトがあって、そうそう。

竹林ユウマ: うん。え、次。

安部和音: こんな感じでホテルは考えてる。ありがとうございます。

竹林ユウマ: はい。はい。

00:23:21

安部和音: これブレンダーじゃないん? ブレンダーとかじゃなくて、あのゲーム、ゲームレンダラー使ってるからこれ動き回れるんすよ。

竹林ユウマ: うん。

安部和音: 後で後で見せます。

竹林ユウマ: なるほど。

Kazuya Sano: E

竹林ユウマ: すげえな、これ。

安部和音: うん。あ、でこのリッツハウス入ってるのは俺のデスクトップ PC から画面共有できるようにしてるので後で歩き回ってもいけるかなと思ってます。ちょっとハイスぺスじゃないと動かないんですけど。うん。

竹林ユウマ: うん。ふん。ふん。ふん。

安部和音: ま、こんな感じは、ま、わ、ワモダン、和モダンって言ってる和モダンとコン壁っていうコンセプトつつたら、ま、このクロスの色だったりとかで、そこにいい感じにこう目のアクセントを入れてくださいねっていうことは指示したら、ま、こうなったって感じですね。うん。こんな感じ。ま、ま、懸念してた狙いすぎ感は、ま、まあまあまあまあ抑えられてるかなぐらいのうん。

竹林ユウマ: うん。

安部和音: 感じですかね。

竹林ユウマ: 客室何個ぐらい置く予定? ええ。

安部和音: うん。あ、客室が12部屋かな。

00:24:34

竹林ユウマ: いね。うん。うん。ふ。

安部和音: これが1回部分でいや、1泊2万3000、2万3000円ぐらいで、えっと、で、1人あたりりっていうあのコントロール PMS でするじゃないですか。

Kazuya Sano: 1泊、1泊3万ぐらい今事業計画できるけど。うん。

安部和音: なんか1人当たり7000円とかあれじゃなくても1部屋貸し切り2万円、2万3000円ぐらいっていうので考えてます。なんでな、何部屋が、ま、こ、これでいくと8人とか止まれました。

Kazuya Sano: 何人ぐらいまでれんの

竹林ユウマ: うん。

安部和音: えっと、そうすね。これ広いので8人8人安いと思う。

竹林ユウマ: 手考えたらめっちゃ安いな。

安部和音: 8人。8人。うん。全部大体8人止まれる。ま、想定としては止まれるって感じで。えっと、パースの方にどっかあるかなと思うんすけど。とかないかな、これ。あ、このバンクベッド。

竹林ユウマ: うん。

Kazuya Sano: もダブル2つは4人みたいな感じの想定でやってるってこと

00:25:35

安部和音: そういうことですね。

竹林ユウマ: うん。

安部和音: で、あの、バンクベットっていうタイプがグランなんか石水がやってるこの2段ベッド式っていうのがあるんですけど、ま、これは結構強めにコンセプトとして打ち出せるものになってて、えっと、これで8人って言ってるって感じですね。比較的安いんですけど、あの、それは僕が結構ネガティブで資産出してくださいってずっと言い続けてたので、2万3000円でもいけるっていう形にしてもらっ

竹林ユウマ: あ

安部和音: たってだけで、ま、あの、建築としてはもちろん新築だし、あの、デザインも相当こだわるので、あの、子境によっては上ぶれを全然狙えるっていうビジネススキームかなと思、あの、モデルかなと思ってます。もう本当にあのバブルこれからわかんないですけど、ま、バブルが起きたら6万円になったりとか6万円、7万円になった時に耐えられるようなデザイン性をお願いしますっていうこと言ってるので、ま、それはちょっと狙ってるって感じですかね。

竹林ユウマ: ターゲット的には結構内行者向かい。

安部和音: ま、えっと、それが、えっと、元々はインバウンド結構やっぱり狙ってて、多分767割ぐらいインバウンド狙うっていうコンセプトでやってたんだけど、あの、ちょっと持続可能性がないので、あの、福岡の女の子を呼んでくださいっていう形にしたんですよ。

00:26:56

竹林ユウマ: うん。ふん。ふん。

安部和音: で、福岡のあの女の子ってなんでそう言ってるかって言うと、あの僕が、ま、見る限りでは別府でうまくいってるホテルが、あの福岡ナンバーの軽自動車でタントのなんかピンクの新車の可愛いやつみたいなのが多い印象で、ってことは、ま、福岡の女の子3、4人とか2人とかで来るとかっていう想定なんですよ。で、ま、男が運転してないってことはそのカップルでもないじゃあ女子会かなとか、ま、そういったので、ま、3、4人旅とか女の子のっていうのをかなり狙って狙いたくて、元々あの青、青だらけやったんですけど本当にあのホテルのクロスの内装とかほん青

竹林ユウマ: うん。うん。ふん。

安部和音: だらけやったんですけど1、あと3部屋ぐらいはこういう白っぽい内装で作ってもらって、ま、福岡の女の子がなんかパッと見で止まりたくなるよう

竹林ユウマ: うん。

安部和音: なものになるかなって感じですね。

竹林ユウマ: はい。

安部和音: 多分このパスよりも実物の方がかきかっこよくなると思う。

竹林ユウマ: はい。うん。旅行はお金がかかるから近場でちょっと女子会しようよみたいなテンションで来んのかな。

00:28:12

安部和音: うん。うん。うん。うん。うん。うん。なんかドライブの延長戦上みたいなのところもあるかもしれない。

竹林ユウマ: あ。

安部和音: で、温泉入るにしても安いしうん。

竹林ユウマ: うん。

安部和音: ご飯食べるにしてもその辺で食えば安いし、ま、無人ホテルだから。うん。ま、そんな感じかな。ま、別ってそんなにお金なくても楽しめる場所。

竹林ユウマ: うん。なるほど。うーん。

安部和音: うん。うん。えっと、商店街がある方しあ、そうそう。

竹林ユウマ: こ、これ立はあれ、あの商店街がある方駅の逆ああでああ、なるほどなるほ

安部和音: あ、で、あの、けぞさんが3店舗目をツチムっていうお店をオープンしたんですけど、そこで朝ご飯プランをあの、うちと連携してやってくれるっていうことに、あの、まあ67割ぐらいはもう今なってる状態なんで、それありきで今うちも進めてるって感じですね。

竹林ユウマ: うん。

安部和音: で、商店街の面白いお店がいっぱいあるんですけど、そこら辺に最近なんかご飯食べに行ったら挨拶して、あの、マップとか載せていいですかとか、パンフレットで紹介させていただきますとか、そういったことはかなりあの、言って受け入れてもらってるっていう状態ですね、リチ的にめちゃくちゃ近いです

00:29:32

Kazuya Sano: 結構近いんだね、立的

安部和音: ね。やっぱもう3徒歩5分内で全て完結するかなって感じですね、遊びは。

竹林ユウマ: うん。

安部和音: うん。

竹林ユウマ: なるほど。

安部和音: そんな感じですね。ま、ちょっと遊びに来てください。

竹林ユウマ: ツチム行きたいな。

Kazuya Sano: て行きてさいに行き

安部和音: あの、けぞさんが、あの、佐野さん呼んでました。お願いします。すいません。

ちょっとこの資料じゃ全然そういう部分足りてないんで、なんか聞いてくださったらあの、お

答えできるって感じなんですけど。

竹林ユウマ: うん。

安部和音: あとその100万円取ってきたっていう、ま、打ち訳けで想定してるのが、えっと、ま、この、この部分ですね、ブランドアイデンティティとビジュアルアイデンティティ、ロゴ、ライティング、あの、佐野さんにライティングでやっていただけたらっていうのと、あとのパンフレットと地域マップですね。あとごめんなさい。うんと、アロ、アロマを入れたいで、アロマディフューザーの購入費はそのなんか建築の部分から出るのかっていうのをちょっと今、あの、交渉中って感じです。

竹林ユウマ: うん。

00:30:49

安部和音: うん。

竹林ユウマ: なるほど。

安部和音: そうですね。ま、そん、そんな感じで考えてるんですけど、あの、僕がこういったのをちょっと回すっていう経験があんまりないので、あの、佐野さんにどこかでバトンタッチできればと思ってて、なんかイメージありますか？はい。

Kazuya Sano: オッケー。えっと、俺がこういうのをまるっと受けちゃう時は俺はコンセプト作ったり文章を書いたりするのが好きなので、そこあとマーケティング周りもある程度データ取って調べてみたいなのとか、ま、考えたりするので、で、ま、それで、ま、こういうターゲットとか、ま、こういう

安部和音: はい。うん。うん。うん。うん。ふんふん。ふんふんふんふ。

Kazuya Sano: 状況の中で、ま、こういう存在感のあるものとしてやりましょうみたいなものとして、で、それで、ま、それ、そういう前提があった上で、ま、うんと、基本のコンセプトはこういう感じで、で、そのコンセプトがあってデザインはこういう感じでみたいな風に話をしていくが、ま

安部和音: ふん。ふん。うん。うん。うん。うん。

Kazuya Sano: 、そのデザインはこういう感じでみたいなところはデザイナーさんと一緒にやるみたいなところが多いかな。

00:31:53

安部和音: そうですね。うん。ふん。ふん。

Kazuya Sano: ま、コンセプトの部分から話して、で、デザイナーさんとのできることと、ま、その感覚とあとはそのビジュアル的なところからのアプローチみたいなのと話を

安部和音: はい。うん。

Kazuya Sano: 、ま、こういう感じいいかもねみたいな話をつけた上でうんとそっちの方に持ってくみたいなのもする時もあるし、もう俺がもう書いて

安部和音: うん。うん。ふん。うん。ふん。ふんふん。

Kazuya Sano: ちゃってからの時はま、こうがつつり書いちゃってみたいな感じで、え、やる時もあるして感じですね。

安部和音: ふんふんふん。あ、そうですね。それでそれだ。

Kazuya Sano: うん。うん。うん。

安部和音: それでいくとかなり上流の方からあの、ま、ま、上流というかもその火流の建築部分がかなり、ま、進んじゃってるのであれなんですけど、もうあの一旦その01というか上流みたいな部分から佐野さん入っていただけると助かるなと思ってます。

Kazuya Sano: うん。うん。うん。まあ、なんか別にあの建築がもうこういう感じなのはありません、ま、その周りのことを考えるとかは全然できると思うので、

00:32:45

安部和音: うん。はい。よろしくお願いします。

Kazuya Sano: それはいかな。うん。

安部和音: そうですね。

Kazuya Sano: あとは竹林君的には何をしたいとかはありますか

安部和音: ふんふんふんふん。

竹林ユウマ: 何をしたい? え、正直したいことはちょっとまだ分かってなくて、ま、ただ求められてるのがやっぱりその VI の整備みたいなところなんですか

安部和音: ふんふんふん。

竹林ユウマ: 。とりあえず佐野さんにコンセプトの部分作ってもらって、で、それパスしてもらって、ま、ちょっとどうにかロゴだったり、そのデザインシステムの部分を考えていく

安部和音: うん。ふんふんふんふん。

Kazuya Sano: うん。

竹林ユウマ: っていう流れが1番シンプルなのかなって感じですね。

安部和音: あ、そうですね。シンプルだとそれなんですけど、あの、ちょっと図にこうやって書いちゃってるのもちょっと僕の中ではちょっと違うんですけど、マーメントで書いてるけど、

Kazuya Sano: H

竹林ユウマ: うん。うん。うん。

安部和音: ま、もうちょい上に上がってくるイメージ竹林君がで、えっと、そこって結構わツホビーで俺が、俺がこのさ野さんの立ち位置で結構やってきた

竹林ユウマ: ああ。なるほど。

00:33:55

安部和音: 部分があるから、その竹林君をもっと上にあげるっていうのは、ま、俺が結構手伝えるかなと思ってで、先ば君朝した理由については、あの

竹林ユウマ: うん。うん。うん。うん。うん。うん。

安部和音: 、やっぱ俺が言語、俺の言語化に対してそのビジュアル的なアプローチっていうのがすごく適切にしてくれるのが的確に打ってくれるのが竹橋林橋君

竹林ユウマ: うん。

安部和音: しかないからっていう部分なんではい。

竹林ユウマ: なるほど。

安部和音: ま、ま、で、で、あの、かつ、ま、デザイン、あの、佐野さんから竹林君という流れでよいか、まあ、なんかな、なんですかね。ま、もうちょい上がってくるイメージで。

竹林ユウマ: うん。あの、もう完全うん。

安部和音: うん。

Kazuya Sano: ま、一緒に作

竹林ユウマ: みんなでフロ式を広げてアードコードやる感じですね。

安部和音: ま、そう、デザイン、デザインからやっぱりあのクリエイティブディレクションの方にあの訴え素給できる何かってのも絶対あると思う思うんで、まあなんかそれは結構同時進行で

竹林ユウマ: うん。うん。うん。

00:34:47

竹林ユウマ: ふん。ふん。ふん。うん。

安部和音: やれる形組だといいなって思ってます。

竹林ユウマ: うん。オッケー。なるほど。なるほど。

安部和音: なんかよくわかんないけど、なんかこうプレスト的にダベっていく中でこうなんかできていくみたいなのが理想なんすけど、ま、それぞれのちょっとファファ、ファシるのが俺ができないのでその野さんにお問い合わせきたらと思ってます。ちなみに、ま、今日あの当日話すことっていうので、ま、とりあえずこれかなって思ってます。うん。します。

竹林ユウマ: うん。うん。ふん。ふん。ふん。ふん。ふん。ふん。なるほど。

Kazuya Sano: なんか、ま、なんかそういう時に俺がよくやるのはうんと、ま、そんな時によって色々あるんだけどうんと、ま、前提の整理としてうんと、ま、どういう、ま、そのマーケットがどういう状況であって、で、えと、ま、クライアントというかこの状況だと、ま、このホテルがどういう状況であって、で、そ

安部和音: はい。うん。うん。

Kazuya Sano: こがどういう方針で行く予定なのかみたいなこと目の線合わせをしつつでそっからじゃあ何ができたらいいだろうねみたいなことをまコンセプトとかあんまり

00:35:49

安部和音: うん。ふんふんふ。うんふんふんふんふんふんふん

Kazuya Sano: 詰め切る前に1回ふわっと考えたり話したりしつつうんとビジュアルからまとめる時もあるかなビジュアルま例えばなんかあのとかでなんか雰囲気をあのそのま例が来ますったなんかそういう色の何かいい感じのアプローチみたいなものをなんかまとめてたりしたりするし、うんと、ま、我々コンセプト的なもののアプローチの仕方を考えたりとかするしみたいなっていうのを、ま、あの、で、ま、それを出し合いつつ、ま、例えばそのビジュアル的な、あの、俺がそのよく一緒に仕事してたデザイナーさんはそのブランドデザインブランドから考えるみたいなのが結構得意な人だったからそうい

竹林ユウマ: うん。うん。

安部和音: うん。

Kazuya Sano: いうなんだ、ピンタレストであのイメージ集めていったらなんかコンセントこういう感じがいいんじゃないかみたいなのかは全然なんか思いついたりするような人だったりした

安部和音: うん。

竹林ユウマ: うん。

安部和音: うん。

Kazuya Sano: のでなんかあのま、その辺の話とかもしつつでそこですり合うところがあったらすり合いったりとかま、さらにあのがいい感じになったりとかし

安部和音: うん。うん。うん。うん。

00:36:57

安部和音: ふんふんふんふんふんふんふんふんふんふんふんふんふん。

Kazuya Sano: たりもするのでま、そういう話でまとめていただいたことが

竹林ユウマ: なるほど。

安部和音: そううっすね。来来週かまちよつと今月中ぐらいに竹林君が来るんですよ。あの、別府の方にで、ま、僕があ、マップに乗せようと思ってるお店は結構一通り行ければと思ってる、で、ま、まださらちなん

竹林ユウマ: うん。

Kazuya Sano: うん。うん。

安部和音: で土地自体は、ま、そのなんか、ま、リッチしかあのヒントはないんですけど、その、ま、そこにどういうホテルがあったら、どんな哲学、あの、デザインのホテル、あの、建築の方じゃなくて、どんなソフトウェアデザインのホテルがあればこのお店にとっていいし、このお店にとっていいし、この

竹林ユウマ: うん。うん。

安部和音: コミュニティにとっていいし、このフードにとっていいっていうのはなんか来週再来週き来てくれたらピンタレストで書き集めたりとかってのはできそうかなとちょっと思ってますね。

Kazuya Sano: うん。無人ホテルであることは今後しばらくは変わんなそう。

安部和音: そうですね。やっぱり地方の課題としては人材むずいよねっていうのはあるので、ま、そこって社会的にもう、ませ、正解かなと思ってる、じゃあ、じゃあそのあり方ってい

うのをうまいことこう落とし込んで経済的にも成立していて、何か取り組みにも繋がっていくような形にできそうか

00:38:39

竹林ユウマ: うまい。

安部和音: など無人ホテルっていうのは思ってます。で、友人は後々友人のホスピタリティなとかなんかこうなんて言うんだろうな、イベントができたりとかアンタプトみたいですね。なんかああいう形みたいなのを憧れてはいます。

Kazuya Sano: なんかその辺でその体験が、ま、ちょいちょい変わるかなとか、即ポイントも変わりそうな気もするなどはので、ま、なく変わんないらま無人の方向でかな。

安部和音: あ、そうですね。はい。

Kazuya Sano: うん。

安部和音: ま、無人、無人だからこそのコミュニケーションっていうのがちょっと僕あるかなとはそれ思ってますよね。あの、サヌセカンドホームに止まった時はパンフレットが置いてあったりとかなんか本が本棚に置いてあるんですよ。

竹林ユウマ: うん。

安部和音: で、それをメッセージとして捉えるみたいなのって、こう人が言葉で進めるのと違うやっぱ受け取り方、人来るような伝わり方っていうのがあるからなんかそれは結構僕は佐野さんに結構でできたらなと思ってる部分ですね。

竹林ユウマ: うん。

安部和音: 無人だからこそのコミュニケーションだと思ってます。それがうん。

Kazuya Sano: なんか体験全体をどう考えるかみたいなのところではあるなと思っていて。

00:39:56

安部和音: はい。

Kazuya Sano: うん。そうね。ま、うんと、ま、ターゲットをどんぐらいその狭く絞るかとか、その耐久性を何年ぐらい考えるのかみたいなこともあるんだけど、なんかあの、短期間でもいいから、あの、しっかりターゲットに刺さるみたいなのを考えると、あの、ま、もう一昔前だけど、ホテル

安部和音: うん。うん。うん。うん。うん。ふん。ふん。ふ。

竹林ユウマ: うん。

Kazuya Sano: C みたいなアプローチにおそらくなると思うんで、その上所みたいなことを考えてホテル C これはそれは嫌いだけど崎さんってるホテル京都とか大阪とかでるところでもあんぐらいの世代でも知らねえのかもうじゃあ本当に俺らぐらいの第のものって感じ過去の遺

安部和音: あ、ホテル。ああ。はい、はい、はい、はい。

竹林ユウマ: 持てるし。

安部和音: うん。うん。ふん、ふん、ふん。

竹林ユウマ: ああ。なんかめっちゃめっちゃパンクっすね。

安部和音: ああ、そうなんすね。あ、CってSHですか？おお、イルカ出てきた。

00:40:54

Kazuya Sano: あ、そう、そう、そう。パンクか。サイバーサイバーパンクっぽい感じ。

安部和音: いるか使ってた。ああ。

竹林ユウマ: うん。

安部和音: ああ。

竹林ユウマ: へえ。

安部和音: ああ。

竹林ユウマ: うん。

安部和音: ああ。これなでもメッセージはちょっとよくわかんないっすね、これ。

Kazuya Sano: 2010年代って感じですよ。まあ、この辺はもうそういうなんて言うんだろ
う、かしというかなんかこういう感じなんかこれなんかそういうとにかくおしゃれに見せるとか
だったらなんかま、こういうのもあると思うんだけど。

安部和音: うん。うん。うん。うん。ま、歯ぐらかしというかそうっすね。

竹林ユウマ: うん。

安部和音: まあ、なんかはい。あ、どうぞ。うん。全くないですね、それは。ま、うん、うん、う
ん、うん、うん。うん。ふん。ふん。ふん。ふん。あ、分かりました。ふんふんふん。

Kazuya Sano: そういう感じじゃないよね。おしゃれでバズりそうな感じに見せるとかだった
ら、ま、こういう方向性はあるけど、ま、これとどんだけずらすのかみたいな意味でのあのな
んつうんだっけ？えっと、ベンチマークにはなるか。

00:41:40

竹林ユウマ: うん。うん。うん。

安部和音: でも、ま、個人的には自分たちが強くなりたいってのがかなりあのエ語としては
あるので、あの、何でもそれこそステابلみたいにかう何でもできる行政とも仲良くできる
なんかこう社会社会的にもインパクトがあるとか何かこう面白いこと思いついた時に面白い
ことやれる仲間がいるとかなんかそ

竹林ユウマ: うん。

安部和音: そういったところになんか仲間に混ぜてくだあの仲間に入れてくださいっていう
意味合いでのホテルではあるかなっていう思ってますね。

竹林ユウマ: うん。

安部和音: なんかそれで言うちょっと1個しか見つかなかったんですけど、こっかい

なと思ってたのがなんかシェアホテルスちょっとなんか K 5とかとなんかやり方は似てフードっていうのをすごい活かそうとしてこれこれは高立てですかね。

Kazuya Sano: うん。ああ。

竹林ユウマ: うん。

安部和音: はい。

Kazuya Sano: ああ。はい。はい。はい。

安部和音: で、ま、地域との強制っていうのを、ま、コンセプトに打ち出してるのかなんかそういうのは結構共感するんですよね。僕も別府だからできることとかやっていきたいですし、場所が変わったらまた違う。

竹林ユウマ: うん。

Kazuya Sano: 函館のやつこの函館立のやつ止まったことあるかうん。

00:42:57

安部和音: あ、はい。あ、女すか。函館が箱。

竹林ユウマ: へえ。

安部和音: これ、これですかね？箱ってやつ。

竹林ユウマ: あ、銀行。これがいつた？銀行をリノベーションしてっていう。

Kazuya Sano: うん。うん。

安部和音: あ、これがそうなの？あれ？これ、これまた違う。

Kazuya Sano: あ、これではないね。

安部和音: はい。はい。それって

竹林ユウマ: あ、これまた別なのか。

安部和音: K 5にまたなるな、なるんすよね、多分。うん。うん。ふん。ふん。

Kazuya Sano: ま、K 5なのか、あの、K 5かわかんないけど、あそこのあの、なんだっけ、あの会社がやってるブランドにはなるようちょっと

安部和音: ま、これを見るに海沿いでやってたら海沿いでやるホテルをやってるし、まあなんか場所にやっぱり準居してたりとかフードフード、ま、地域と強制するっていう、ま、ステートメントがあったりとか、ま、多分取り組みも多分何かされてると思いますし、ま、そういった形が理想かなとは思っ

竹林ユウマ: うん。

安部和音: てますね。で、なおかつ結構ちょっとこれ、これを見ると内装ちょっと似て木を使ってちょっと青色が入差し色が入ってっていうところはかなり似てるなと思ってたの

00:44:01

竹林ユウマ: うん。

安部和音: で、ま、この金沢の組むっていうやり方はちょっと参考にしたいなって思いました

ね。

竹林ユウマ: うん。

安部和音: で、原口さんってめっちゃおじいちゃんなんですよ。65歳か70歳ぐらいのおじいちゃんなんですけど、まあなんかセンスはすごい良くて頭を切れるお金持ちのおじいちゃんイメージであのぜ全本当は全の部屋を作ってたんですよねみたいなおぼ全額そうお坊さんと呼んで前をさせる体験を作るみたいになんか部屋を作ってみたかったみたいな

竹林ユウマ: 全額。ああ、いいな。

安部和音: だからまコンセプト意識としてはそういったものが多分内装に現れる建に現れるものにはなってくるかなっていうので、ま、善だったりお

竹林ユウマ: うん。

安部和音: 茶だったりとかそういったもののっていうのはなんかこうなんて言うんだろうな。インバウンド向けに派手にやるんじゃなくてこう人割り伝わる何かにそこも落とし込めたらすげえカッコいいものにはなるよねとは思ってます。

竹林ユウマ: うん。なるほど。

Kazuya Sano: あ。

竹林ユウマ: なんか見え方とか例えばブランドトーンとかはモダンには見えるけど各にある大事にしたい部分は割と日本の思想みたいな部分ものがあるっていうイメージ。うん。

安部和音: でうん。うん。

00:45:21

安部和音: うん。そうだね。ま、ま、それとやっぱ地域との強制というか、やっぱお店を斡旋して別府でうちのホテル止まるんだったら絶対この店のどれかに行ってくださいみたいなみたいななんかこうちょっとそのコミュニケーション的な部分はデザインにも落とし込みみたいんだよね。

竹林ユウマ: ああ。

安部和音: だからなんて言うんだろうな。

竹林ユウマ: うん。

安部和音: ここ、ここがスパイスぐらいの感じかなとは思ってる。

竹林ユウマ: うん。ふん。ふん。ふん。ふん。うん。なるほどね。なんかジャストアイデアだけど、あの仏教でいうあの演技っていう概念がすごいこのかさんが言ってるブランドの哲学感と合うなって思って。

安部和音: うん。うん。うん。うん。演技この演技。

竹林ユウマ: そうそうそうそう。その演技。

安部和音: うん。ふんふんふんふんふん。

竹林ユウマ: その編むとか結ぶとかうん。

安部和音: ああ。あ、あ、そうかも。そうかも。ほ、ま、そんな原因や条件が相互に関係し合って成立してはいはいはいはいはい。

00:46:26

竹林ユウマ: なんだろうな。な、何て言えばいいんだろ。うん。ああ、そう。もうバタフライエフェクトのこと。

安部和音: あ、でもそれはすごく思うかもしれない。

竹林ユウマ: うん。なんかかさんが立てようとしてるホテルでここだけで完結してさせて欲しいんじゃないくて、これをきっかけになんかいろんな場所に出向いてその別の

安部和音: うん。うん。うん。うん。うん。

竹林ユウマ: 予算に触れてほしい。そのきっかけでありたいみたいな。

安部和音: そう、そうだね。

竹林ユウマ: うん。

安部和音: あ、めちゃくちゃいいかもしれない。

竹林ユウマ: なるほど。なるほど。

安部和音: それだね。なんかでも自分が自分のため自分のリッツハウスは自分たちの儲けのためにとりあえずやるホテルではあるんだけどそれがみんながそれをやっていて

竹林ユウマ: うん。

安部和音: なおかつこの演技っていうのが出来上がってるってのがいいローカルコミュニティになってすごい思うからなんかそういった形がありそうかな。

竹林ユウマ: うん。うん。うん。ふん。ふん。はい。はい。

00:47:27

竹林ユウマ: はい。

安部和音: うん。演技っていいね。

竹林ユウマ: 人気ね。

安部和音: 演技ってそういう意味なんだ。元々。

竹林ユウマ: そうね。最初なんかな何だっけな。ま、元々はその区から下脱するためにブッダが解いた概念であんまりポジティブな言葉ではなかったんだけど、ま、今でも結構そのななんて言うの？

安部和音: うん。うん。うん。

竹林ユウマ: 結構スピリチュアル的なそのポジティブらしいニュアンスを含んだ言葉になってるんだけどうん。

安部和音: うん。うん。うん。うん。うん。

竹林ユウマ: ま、元々はいいい意味でもあり、悪い意味でもありうん。

安部和音: うん。うん。ま、でもなんか全だよ、本当に考え方が。

竹林ユウマ: そうだね。

安部和音: うん。

竹林ユウマ: ま、前もそうだし、ま、大衆派の仏教でも原子派の仏教でも割と仏教全部で精通してるからいね。

安部和音: うん。うん。詳しいね。

竹林ユウマ: 仏教はね、詳しい。

00:48:31

安部和音: そう。

竹林ユウマ: うん。

安部和音: なるほど。

Kazuya Sano: なんかにちょっと話戻るけど、そのさっき言ってたそのシェアホテルズみたいななんか色々あるうちのあの1個ま、ステープもそうだけど色々なんか全国に展開していくもの1つとするのかももう別にあるやみたいなものとするのか。

安部和音: はい。はい。うん。うん。うん。うん。うん。うん。うん。うん。

Kazuya Sano: ま、別にそこから始まってその後考えれでもいいと思うんですけど、なんかどんぐらい先を考えておくかによって多少変わるかなと思ったり

安部和音: うん。うん。うん。うん。

Kazuya Sano: するけど、それはなんかな

安部和音: うん。うん。夢としてはやっぱりステープだったりシェアホテルズみたいに全国であの僕がやっぱ好きだなって思ったフードにホテルを立てられるような力をつけたいと思ってますんで、その1投目っていうイメージですね。ただ、ま、あの、合理性が先に来るかなと思ってて、やっぱ別府でもっともっと立てた方がいいってなってる時期は別でもっともっと立てるかもしれないですし、ただコンセプトとしては、あの、夢としてはそういう感じです。

00:49:37

安部和音: ま、スケーラビリティは考えたいっていう感じですかね。

Kazuya Sano: ま、あんまり最初考えすぎなくてもいい気もするから、ま、後々広がっていく時にね、調整するとかでもいいと思う

安部和音: まあ、考えすぎなくていいと思います。まずうん。そうですね。なんかあるじゃないですか。日本全国やっぱりその年その年で暑い土地ってあるじゃないですか。

竹林ユウマ: うん。

安部和音: そこに早めにやっぱりあの土地を早めに抑えられるとあのい普通にいいんですよ。絶対早めにやった方がいいんで。そうなった時に余裕があってコンセプトも持っていてっていう状態だと立てるだけっていう状態になるとめっちゃうん。

竹林ユウマ: うん。

安部和音: いいよねとは思ってますね。

竹林ユウマ: なるほど。

安部和音: うん。

Kazuya Sano: 毎回お金回収しよう。

安部和音: そうですね。うん。お金、お金でもあの、今一、今考えたら金融機関さんともそう

いう感じだねって言って進めてるのはもう2投目以降ありきでやろうやろうねっていう話はしてて、あの、ま、決算がどれぐらい綺麗に作れるかっていうので、あの、うちも次出せると思いますんでっていうのも

竹林ユウマ: うん。

安部和音: 金融機関さんにお話いただけてますから。

00:50:53

安部和音: そうですね。ま、そんな、そんな感じですね。

Kazuya Sano: まあなんかそういう服があるとその辺の役に当たるかもね。その金融期間とかにする役に当たるかも。ま、この展開していけるイメージです。

安部和音: そうですね。そうですね。実際、ま、金融機関さんはああ、そうですね。金融機関さんから土地が入ってくることが少なくないんですよ。あの、こんなにいいところの土地があの、不動産業界で出回ってなくて、金融機関業界で出回ってるみたいなことがよくあって、ま、それってやっぱり差し抑え

竹林ユウマ: うん。うん。

安部和音: だとか相続だとかそういった時にあの不動産会社に付き合いがないとかそういったパターンの時に銀行さんがあったりするし、それは地方で

Kazuya Sano: うん。

安部和音: かなり強いと思ってますから、金融機関さんありきのビジネスは、ま、しばらくずっと続けていくかなと思ってます。うん。そう、そう。うん。ま、ま、なんかマクロの意味でも結構アムアむっていうのを考えてるですね。いろんなフードをあの、うちのブランドでつけていきたいっていうのはかなりあの、あるから北海道のあの素敵な場所だったりもで、なんかそうですし、

竹林ユウマ: おお。

00:52:15

安部和音: なんか僕がすごい綺麗だなって思ったのが熊とか行くじゃないですか。で、熊で行って紹介されたご飯屋さんとかをいいなって思ったご飯屋さんとか県外で行ったら熊出のことまた強さなこと知ってるとかあのなんかダバターナッツっていうなんかバターナッツあ、違うナツバター作ってるところがあってなんかそこに行ったらなんかいろんな飲食店の人日本全国の名前知ってるとかなんかそうなんかすごい繋ががいいもので繋がってる感じがあるから、それをこうホテルでホテルっていうなんか物理的に見えるものでなんかあのこのアムアムホテルのファンの人たちが全国でどこどこ行ってもこのアムが信頼するお店に連れてってもらえるとかまなんかそういった意味もあかなってと思ってますね。ミクロの部分で飲食店だったり、お店を繋いだり、観光地を繋いだりっていうのが1つと真黒で剣を繋いだりとかうん。なんかそういったなんか美式的うん、なんか旗みたいなうん。いいものはこの

アムの周りにあるよっていうものにいつかなったらなってとは思ってます。

竹林ユウマ: うん。

安部和音: だからそのやりたいことに対して和モダとかコン壁っていうのは全然合っていないのでそのすり合わせをしていかないといけないで後々それが綺麗に収まったねってなっていくようななんか形にならなって思ってます。

00:53:57

竹林ユウマ: うん。

安部和音: うん。

Kazuya Sano: なんか、あの、こっちが提供できるもの、したいものと、あと顧客ニーズとの噛み合わせがなんかあるだろうなと思っていて、え、客ニーズは、ま、多分ちょっと調べないとわかんないかもなと思ってるんだけど、ま、その別に来る人がどういう人たちで、で、その人たちがどういうことを求めてきてんのかみたいなことは、ま、ちょっと探せば多分ある程度あると思うんですけど、なんかそういうもの

安部和音: はい。うん。うん。うん。うん。うん。うん。ふん。うん。ふん。ふん。ふん。ふん。

Kazuya Sano: からじゃあどういうニーズに対して当てていくのかみたいなこととかまああるかなのは1個あるのかな。

安部和音: ふん。ふん。あ、そうですね。

竹林ユウマ: あ。

安部和音: うん。ふん。

Kazuya Sano: うん。うん。うん。うん。

安部和音: ま、それで言ったら OTA だとか SEO の部分で別府ホテルって出てきた時に、ま、1番上に上がってくるようなホテルとして

Kazuya Sano: うん。うん。うん。

00:54:47

Kazuya Sano: ::

安部和音: は今作ってると思うんですよね。あの、建築側、原口さん、イカがですね。で、えっと、そこで、ま、そんなにリテラシ高い人に来て欲しいわけじゃなくて、リテラシーがそんなにない人たちがそこに気づくっていう体験をかなり連れていきたいので、あの、うちに止まっときゃ間違い、あの、アンタツとマジでそうじゃないですか。ワンタツと止まっとけば間違いなくて佐野さんに紹介したそのもうあのホテル予約しときましたんでから世界がもう全部広がったみたいなあの感覚はすごく良かったなと思うのでそれを無人でやるっていう感じですかね僕もそういった意味で言ったらその飲食店だとかっていうのにリテラシ高くなかったんですけど気づいたので気づかせてあげたいとかっていう意味合いであのま的に言ったらマスにさしていいかなと思ってます。だからうん。

Kazuya Sano: うん。ちょっとなんか考えないと俺はまだわかんねえなと思っているが。え、うん。どうなんだろうな。

安部和音: うん。うん。

Kazuya Sano: なんかあの地元の人たちと繋がりたいと思って、あの若い女子たちがグループで来るかっていうとなんかあんまそんなような感じじゃないような気がしてて、なんかどっちかっていうとみたいな1人旅スが多いところだったら多分結構そういうノリでいけると思うんだけどなんかあんまりそこ押しすぎてもなみtainなところがありそうな気もするのでちょっとなこのアリを考えた方がいいかもしれないがでもなんかそのどっか例えばわかんないけど東京とかあの大阪と

00:56:12

安部和音: うん。うん。うん。うん。うん。うん。うん。うん。うん。うん。うん。うん。うん。うん。うん。うん。ふん。ふん。うん。ふん。ふん。ふん。ふん。ふん。

Kazuya Sano: から作る感度高めのそのそれこそなんか別にアート見に来るような人みたいな人とかが止まるみたいな感じの想定だったらなんかそういう乗りもあるような

安部和音: うん。うん。

Kazuya Sano: 気がするからなんかその辺をちょっとかな何て言うんだろうな。

安部和音: うん。うん。うん。うん。うん。

Kazuya Sano: うんとちょっと揉んだ方がいいかなっていう気がします。

安部和音: うん。うん。うん。そっか。そこは結構両立しづらい部分になるんですかね。なんないけないかなって。

00:57:01

安部和音: はい。

Kazuya Sano: ま、なんか見方してはなんかあのそういうオプション持っとくとかなんかそういうのが知りたい人はこういうのもあるよみたいなのかにしとくのはありかもしれないけど正面から押すかどうかちょっとわかんねえな。

安部和音: はい。うん。そうですね。うん。なんかディープなお店はディープって書きたいなと思ってますね。で、あのけぞさんとかがやってるのってあのツチームが結構そうなんですけど広いんですよ。スチュウムめっちゃくちゃあの結構フラツと寄ってフラツ入って美味しいね終わりでもう話しかけないみたいな全然いけるなあとててまそういったお店もありますしででも話しかけ

竹林ユウマ: うん。

安部和音: たらすごく喋ってくれたりとかなんかそのバランス感覚が結構別府はいいなってるんですよ。あの、観光客がすごく多いんで、フラツと入ってきて美味しかったで帰ってく人たちがいっぱい慣れてますし、あの、話しかけてくる客も慣れてますしいう。ま、

そうですね。ただ、ま、あの、尖ってる人も、ま、いるので、ま、そこはなんかディープゾーンとか書くのは全然あるかなみたいな思いますけど。両立できれば下、下下したい。

00:58:05

Kazuya Sano: そま、あと俺がちょっと考え、2多分俺が考えた方がいいことだってるんだけど、なんかそのじさんホスルの場合、ホステルの場合にはじさんがいてで、じさんとこ止まってますって言ったら、あ、陣のとこ止まってるんだみたいな感じになるけど、無人ホテルの場合にあの安倍君とこ止まってますみたいなことにはあんまならない気がするんだよね。

安部和音: うん。ですね。はい。うん。うん。うん。うん。うん。うん。うん。うん。うん。そうっすね。うん。うん。うん。

Kazuya Sano: で、それはその復活さらに展開していくとしたらおさらそうで、でもそれであってもそのノリをなんか出すのかあのそののなんかその方面でやってる1番でかいプレイヤーは多分星のリゾートだと思うんだけど、星のリゾートのってというのは結構そういうノリをやろうとしてるんだけど。

安部和音: うん。うん。うん。うん。うん。ふん。ふん。ああ、そうっすね。うん。

00:58:50

安部和音: 主です。はい。

Kazuya Sano: そう、そう。でもなんかちげえじゃん。なんかちげえけど。

安部和音: うん。そっか。

Kazuya Sano: そう。

安部和音: うん。

Kazuya Sano: ま、なんかそれそこが何だろうなっていうのはちょっと考えたいなと思ってはい。でもなんか出せる気はするんだよね。

安部和音: うん。うん。うん。うん。

Kazuya Sano: それはなんか多分メディア的な何かがあるといいと思うんだけど、そのメディア的な何かをどういう位置付けにするのか、その、それをもう野がメディアだっていうことにしてしまうのか、あの、なんだ、わかんない。

安部和音: うーん。うん。うん。うん。うん。

Kazuya Sano: インスタとかでそういう発信みたいなことを定期的にしてればなんかあのなんだろう。

安部和音: うん。ふん。

Kazuya Sano: そのアムのインスタで見ました。

竹林ユウマ: うん。

Kazuya Sano: アにってますみたいなのかでなんかそういうアムのメディアムのメディアみたいな人格ができることによってなんかそこでできるかもしれないみたいなのはあるか

もしないけどちょっとそれが今っぽいのかどうかはわからんから考えなきゃなと思うん。
安部和音: うん。

00:59:31

安部和音: うん。うん。うん。うん。うん。うん。ふ。うん。うん。でも、ま、メディアってめ、多分多分このパターンで1番綺麗ですね。なるほど。ま、お、主にふんふん。主に止まってますって言うてはならないすもんね。確かに。

Kazuya Sano: みたいなのがなんかちょっと俺のざっくりと感想だま、そうだね。でかすぎるからね、箱が。

安部和音: うん。そうっすね。うん。うん。ま、うちもやり方的には結構、ま、マスにはい。あ、今ごめんなさい。な、何て言いました？

Kazuya Sano: うん。なんかそう、俺はそういう感想が今あるけど、高林君とかなんかあるかなて。

竹林ユウマ: あー、正直ちょっとそこに関しては、あの、全然地見がないもんでさ野さんの言ってることを聞いてなるほどっていう感じすね。

Kazuya Sano: ふ。

安部和音: うん。俺もでもなるほどでしたね。

Kazuya Sano: まあわかんない。

竹林ユウマ: うん。

安部和音: 気づかなかったす。

01:00:48

安部和音: これ。

竹林ユウマ: うん。

Kazuya Sano: ま、なんかそんぐらいの世代の人、世代のなんかグループで旅行してるような女子とかに話聞いてみる場合いいと思うけどね。

安部和音: うん。

Kazuya Sano: で、ま、どっかには聞けたらいいなと。

安部和音: うん。ふん。ふんふん。ふんふん。

竹林ユウマ: その女子会は女子会でも割と感度が高めの女子がターゲットのイメージ。

安部和音: いや、えっと、そんなことなくて、ま、でも女子ってみんなインスタやってるじゃん。

竹林ユウマ: うん。うん。

安部和音: 別にカスト関係なくインスタやってんじゃん。

竹林ユウマ: うん。

安部和音: だからそいつらがそのリテラシーが低い人でも、えっと、写真撮ってインスタの

映えるんだよね。

竹林ユウマ: うん。

安部和音: 多分俺がお勧めするお店ってのが全部なんかそのマスの感覚とそのなんていうの天手のカルチャーバックグラウンドにあるカルチャーみたいな部分っていうバランス感覚別のお店

竹林ユウマ: ふんふんふんふん。うん。

安部和音: とか北海道のお店とかバランス感覚があってマスも受け入れられるしカルチャーの人もいいし高い人も受け入れられるっていう飲食店っていっぱいあると思って、なんかそのバランスでホテルをやりたいって感じ。

01:02:08

竹林ユウマ: うん。なるほど。なるほど。

安部和音: うん。

Kazuya Sano: なんか俺もその辺の例はもうちょっと考えたい気がするからなんかそういうア君のイメージするノリのホテルでもレストランでもなんか観光地にある何かでも言うんだけどなんかそういうものをちょっと集めてみる人いいうん。

安部和音: そうですね。うん。ふんふん。うん。ふん。ふん。ふん。うん。ふん。あ、分かりました。はい。ま、でもなんかホテルってあんまないすよね。そういうホテルって。うん。な、いや、なんだろうな。

竹林ユウマ: プにうん。

安部和音: なんかアートホテルはアートホテルだし、マスのホテルはマスのホテ、ま、新築の綺麗なホテルって新築の綺麗なホテルで、それなんかそれ以上やってないし、うちって新築の綺麗なホテルになるんだけど、じゃあアートホテル的なことをやろうとしてるっていうか、その、ああ、ア、アートっていうか、その、ま、地域とのコミュニケーションっていう部分で行くとね。

竹林ユウマ: うん。

安部和音: だからそういった事例って確かになんかあんまりない。

01:03:31

安部和音: ま、もっと資本が大きい会社になって、K5とかその、えっと、さっきの何だっけ？ シェアホテルズみたいな関わり方ってのはあるんだけど、もっと多分庶民的なんだよね。やろうとしてることっていうのはこんなに大きいことではない。

Kazuya Sano: なんか俺のざっくりしたイメージだけど、あのオカルチャーに振ってるカルチャー高いみたいなもので言うと、あの、もうゲストハウスみたいな超安いところかも、あの、なんて

安部和音: はい。はい。うん。

Kazuya Sano: 言うんだろう。それなりにもうあのなんだ、価格、価格感の高い割と高級ラインなものにそのカルタの味付けをしてるかみたいな感じがしてて、その中間

安部和音: うん。うん。うん。うん。そうですね。うん。うん。うん。

Kazuya Sano: ぐらいでそういうカルチャー身のあるものをやってるみたいなこもがあんまり思いつかない。

安部和音: うん。うん。うん。そうですね。それって無理なんですかね、結局。

Kazuya Sano: うん。なんか俺、俺の感覚だけど結構ってなんかキャラするものが多いからそのキャラ立ちさせようとするにあんまそういう感じにならないちゅうかなんつうんだろうな。

01:04:27

安部和音: うん。うん。うん。うん。うん。うん。うん。うん。うん。うん。

Kazuya Sano: なんかな、何て言うんだろう。結構振り切った差別化をしてるものが多いと思うんだけど、ホテル C みたいななんかそういう振り切った差別化をした方がいいべきなのかホテルは

安部和音: なるほど。うん。うん。うん。

Kazuya Sano: 。

安部和音: うん。

Kazuya Sano: それともなんかもうちょっと広目を狙ってやるべきなのかみたいなのはあんまり分からないけど、世の中的には振り切ってるものの方が多いいんじゃないかという気がする。

安部和音: ふん。ふん。うん。うん。うん。うん。うん。そううつすね。振り切ってる方が多くて、高単価が多くてでうちだと低単価には多分なと思うんですよね。ま、比較的安いになるかな。多分ので。

Kazuya Sano: うん。ルズとかもそのなんだあれ、あのトリつたりするから、ま、高いとこと安いとこ量してたりとかするんだ

01:05:19

安部和音: うん。うん。うん。うん。うん。うん。うん。うん。うん。うん。うん。

竹林ユウマ: 内装ってもう X ああ

安部和音: 内装はもうほぼほぼフィットかな。あのボカーで消防書に届けで出さないといけなくて、もうそれが申請中なんで。

竹林ユウマ: 、キッチンがあんの。

安部和音: あ、キッチンある。ま、キッチンがあるのは、ま、あの、リクリエさんと原口さんが、あの、やっぱりなんかあるホテル、あ、ある部屋の稼働率がかなり高いっていうの言ってる、あの、で、外国人の観光客、あ、その別は外国人の観光客多いんで、連泊して食材買って自分でなんか朝ご飯とか作ったりと

竹林ユウマ: うん。うん。

安部和音: かみたいなのは普通なんであるっていう言ってそうですね。うん。うん。うん。そうですね。うん。本当にそう連ですね。うん。うん。まさにそうっすね。

Kazuya Sano: ま、それこそ俺がやってるのは無人のインパクトだけど、ま、ほぼみんなそういう伝え方するから、ま、多分なんやかんや日本人に向けたところかどうか、そのなんて言うんだろう、あの、もう極端な話 . com とか AB 載せてさえいけば外復人も多分来るからなんか差別化要因そっちに向けて差別

01:06:41

Kazuya Sano: 化をする理由があんまりないみたいなのが多分あって、だから多分ブランディングみたいなことをするんだったら日本人にできるみたいなのはある気がする。

竹林ユウマ: うん。

安部和音: ま、あの、ハード、ハードも、ま、外国人はい。

Kazuya Sano: 実態としては外国人がいっぱい止まってんだけど、割合的にはな、何て言うんだろう？日本人、そのブランディングによって来る人は日本人みたいな

安部和音: うん。うん。うん。うん。

Kazuya Sano: 感じにはなるんじゃないかなという気がする。

安部和音: はい。そんなイメージですね。あの、ハードがああの建築物とあのやり方が多分、ま、外国人が来るような仕組みにはもうもうなるので、ま、そこにあえてこうな何かを残す必要ない。印象残したりとかする必要はないかな。

竹林ユウマ: うん。ふん。なるほど。

安部和音: ま、やっぱり欲しいのは、ま、じゃあ7割65% ぐらい外国人みたいな時期も全然あるかなと思うんですけど、じゃあその35% がリピーターになるっていうのが1番やりたいことですかね。別を好きになって、またアームホテルのマップに乗ってる他のお店も行ってみたいみたいな。

01:07:50

安部和音: っていう目的でもう1回来てくれるみたいな。

竹林ユウマ: うん。ま、確かにじゃ、そのカルチャーの怖そうに振るのかライト層に振るのかでだいぶコミュニケーション変わってきそうだね。

安部和音: うん。うん。うん。ま、それで言ったらライト層でいいかなって感じで。そのココアじゃなくてうん。

竹林ユウマ: ふんふんふんふん。

安部和音: ただまあ、まあ、これからホテル立てたところで230年やるホテルになると思うんで、リテラシーっていうのが高まってくんのかなと思って。若、若い、若い子たちがやっぱりあの、そもそももうインターネットに埋もれて育っていくから、ま、リテラシもカルちゃんの理

解もかなり高い人たちが多いんじゃない

竹林ユウマ: うん。

安部和音: かな、これから。

竹林ユウマ: うん。なるほど。

安部和音: ま、漠然とそこへのなんかこう信頼期待みたいなのはあつての今のコンセプトになってるかもしれない。

竹林ユウマ: ああ。はい。はい。はい。はい。

安部和音: うちにとりあえず止まってくれたらあと自分で広がってくよっていう。

竹林ユウマ: うん。

安部和音: うん。あ、で、えっと、なんかそれをちゃんと言ってもらうためになんかしづ感みたいなを出さないといけないかなとは思ってます。

01:09:24

竹林ユウマ: うん。

安部和音: うん。

竹林ユウマ: しずる感。

安部和音: お、美味しそう。美味しそうで行って欲しいかな。美味しそうで行ってもらうのがなんか1番刺さるかなって思ってる。ちゃ、ちゃんとなんか美味しそうな写真載せたりとかい、そう。

竹林ユウマ: ああ、それはそのパンフレットの掲載先の飲食店ね。うん。うん。なるほど。

安部和音: なんかインスタに乘せるような取り方をして綺麗に取ってなんかこううん。で、なおかつ美味しそうみたいな取り方をすればちゃんと言ってくれるかなって思ってるから、ま、めちゃくちゃ細かい話だけど、そういうところは結構作り込んでいきたい

竹林ユウマ: うん。

安部和音: かなってちょっとこだわってはい。

竹林ユウマ: はい。はい。はい。う。

Kazuya Sano: ちょっと俺がそろそろなきやいけないんだけど。そっかな。じゃあちょっと考えてみますかね。

竹林ユウマ: これなんか次のアクション的なところは佐野さんにコンセプトを作ってもらって多分僕は僕であのそれこそピンタレストルでまとめたりとか1回 VI の方からちょっとし

安部和音: あ

Kazuya Sano: うん。

竹林ユウマ: てみるんでそれをどっかのタイミングでガっちゃんしてみるみたいな感じはいいですかね。

Kazuya Sano: うん。うん。うん。うん。

01:10:53

Kazuya Sano: そうしましょう。なんかPinterestでもいいし、なんかあの映像とかでもいいし、なんかそのビジュアル的な方向からなんか参考になりそうなものを集めていってもらってみたいなことやれるということかもしれないね。

安部和音: ほ、あ、うん、うん、うん、うん、うん、うん。そうですね。そうですね。うん。

竹林ユウマ: はい。オッケーす。オッケー。オッケーす。

Kazuya Sano: で、安倍君もそのどういうなんか世の中の事例的なものとかなんか参考こういうのいいみたいなのとかみたいなのをちょっと見ていってもらって、ま

安部和音: うん。うん。うん。うん。うん。はい。

Kazuya Sano: 、それをどっかで知り合わせてきたらいいかな。

安部和音: 分かりました。

竹林ユウマ: うん。

安部和音: じゃ、以上で大丈夫ですね。

竹林ユウマ: うん。

安部和音: た君、ちょっと喋るか。

竹林ユウマ: うん。うん。

安部和音: 分かりました。

竹林ユウマ: そうしよう。

安部和音: あ、佐野さん、ありがとうございました。

竹林ユウマ: ありがとうございます。

Kazuya Sano: おい、ありがとう。ちょっと俺があのお盆ぐらいまでちょっとパツパツ気味なので、あの

安部和音: はい。あ、はい、分かりました。

01:11:40

Kazuya Sano: 8月後半とか末ぐらいになるかもしれないがはい。ちょっとまたそんぐらいできた。

安部和音: じゃあ、あの佐野さんスケジューリングいただいてもいいですか？ご褒美出していただければ。

Kazuya Sano: うん。うん。オッケーです。多分ね、

安部和音: はい、よろしくお願いします。

Kazuya Sano: 8月の25週とかだったらいけるか。

安部和音: あ、はい。

竹林ユウマ: 40お願いします。

安部和音: 月の25もまだ全然埋まってないですね、僕も。

Kazuya Sano: う

安部和音: はい、ありました。はい、よろしくお願いします。ありがとうございました。

竹林ユウマ: ます。

安部和音: います。

竹林ユウマ: うん。ふん。なるほど。

安部和音: ま、ていう感じかな。だいふだいふ喋ったわ。喋った。

竹林ユウマ: うん。

安部和音: じゃあ世の中にどういう事例があるのかついたらちょっとわからん。

竹林ユウマ: そうだね。し、多分俺らの頭の中にいる女の子はもう多分いない気がしてて、
要はそのインスタいい場所行ってインスタで写真撮るはまだギリギリ

安部和音: うん。うん。

竹林ユウマ: あると思うんだけど。

01:12:43

安部和音: まあ、ストーリーはあるかなと思う。うん。うん。

竹林ユウマ: そうね。そう。最近女の子に触れてないからちょそこら辺の感度が全くないんじゃない。

安部和音: ああ。ま、それで言ったらインスタにストーリーで載せるは変わってないかな。で、別に映え衛させるために行くっていうのもなんかお、ちょっと言葉間違えたなと思ったけど映えさせるために行くんじゃないって行ったら映えてた。映えてたら映えてたら美味しかったみたい。

竹林ユウマ: うん。うん。うん。うん。行ったら映えてたみたいだね。うん。うん。なるほどね。うん。うん。うん。うん。うん。うん。うん。はい。はい。はい。はい。

安部和音: なんかそこら辺の場衛とかとかいうレベルじゃないからやっぱ俺が好きなお店がなんか考えて意味があるんデザインもしてるし美味しいみたいなの美味しいっていうなんか本質的なところは抑えつつ商業的にも成功するを狙って

竹林ユウマ: うん。うん。うん。うん。うん。うん。うん。うん。うん。うん。

安部和音: っていうのが、ま、俺はそういうバランス感覚が好きだからさ。

01:13:42

竹林ユウマ: うん。なるほど。じゃあライト層はライト層だけどライト層に振りすぎるって感じでもない。

安部和音: うん。

竹林ユウマ: 気はするね。なんかそのそれこそそのホテルの周りにある飲食店とかを本当に体感で楽しめる人ってやっぱある程度のリテラシーと感度がないと楽しめない感じはあって

安部和音: うん。うん。うん。ふん。ふん。ふん。ふん。

竹林ユウマ: そうでライトすぎるとなんだろうな。

安部和音: なるほど。うん。

安部和音: うん。うん。うん。うん。うん。

安部和音: 入ってるみたいになっちゃうような料理なんだよ。

竹林ユウマ: ああ、なんか飲食店なんだけど、1個なんかちょっとぽいベンチマークがあつて、あの、うちの近くにある喫茶店なんだけど、あの、小川コーヒーっていうさ、コーヒーのブランドあるやん。

安部和音: なんうんうんうん。分からん。うん。ああ。はい。はい。うん。うん。ええ。桜町なの?ふんふんふん。うん。うん。うん。うん。

竹林ユウマ: あのスーパーで売ってるオガコーヒーっていうその豆を出してたりブランドがあつてで小川コーヒーラボラトリー桜新町っていう店が家の近あんだけどちょっとあ、そうそうそうえとあのあ、もうコンクリートバリでくっそリッチなのクソリッチなのに俺ほぼ毎日行っただけどここコーヒー飲みにあのくっそライト層多いのよなんか本当にインスタとTikTokで呼吸してますみたいな人が

01:17:07

安部和音: うん。うん。うん。うん。うん。うん。うん。うん。うん。うん。うん。うん。うん。うん。

竹林ユウマ: いっぱいいるんだけどそうだからその店のコンセプトその実際に来てる客の特性が全然マッチしてなくてもそれは多分おしゃれすぎるがゆえにインスタで拡散

安部和音: うん。うん。ふん。ふん。

竹林ユウマ: されまくって、あの、そのライトソめっちゃ来るようになった。

安部和音: うん。うん。うん。

竹林ユウマ: そのおしゃれっていうのを目がけて、いや、嫌な感じはしていない。

安部和音: うん。うん。それってどうい嫌な感じする?ああ。

竹林ユウマ: 全く。いや、これは1つのなんかすごいまいやり方だなんて思ったし。

安部和音: うん。うん。うん。

竹林ユウマ: うん。来てる人はうん。

安部和音: ま、そっちかもな、俺。

01:17:53

竹林ユウマ: はい。はい。はい。

安部和音: うん。

竹林ユウマ: ちゃんとビジュアルとか思想とかなんか哲学的なところは洗練さしたいけどなんかそれをライト層にも触れて欲しいっていう感じね。

安部和音: うん。入り口になるよねと思う。

竹林ユウマ: うん。うん。

安部和音: ホテルっていうものが結構ホテルってさ、ランダムじゃない?なんか割と目がけていくのってさ、なんかザノットとかさ、そんぐらいじゃない?

竹林ユウマ: うん。うん。うん。うん。まあ、そうだね。

安部和音: なんか目がけていかないじゃん。

竹林ユウマ: うん。うん。うん。うん。

安部和音: その知らない土地に行った時あんまり。

竹林ユウマ: うん。うん。うん。うん。

安部和音: って考えたら、ま、どうしてもライトは来るってなったら、じゃあライトの人たちであ
とその別府に遊びに行った時に俺が好きな店つつうの

竹林ユウマ: うん。

安部和音: はカルチャーの人たちは行くんだよ。もうそもそもから連れてく必要はないかな。

竹林ユウマ: うん。

01:18:41

竹林ユウマ: うん。うん。うん。うん。なるほどね。

安部和音: ま、そのお店が嫌かもしないけど、そのお店の人たちの的にはそういうそうなっ
たら嫌かもしないけど、ま、ホテルの影響力

竹林ユウマ: うん。

安部和音: ってせぜそんぐらいだろうなとも思ってるし、ま、でもうちをきっかけにあのなん
か気づける人が行った時に気づくようなものとだとは思ってるから

竹林ユウマ: うん。うん。

安部和音: 、そういう人たちが入り口になるようなもってのを意識しようかな。

竹林ユウマ: はい。はい。はい。はい。なるほどね。

安部和音: うん。

竹林ユウマ: うん。オッケー。ま、ちょ、行かないとわかんねえな。

安部和音: ま、そうね。まあで、そのなんか俺が好きな店をじゃ紹介したところでオーバート
リズムになるような店じゃないんだよね。

竹林ユウマ: うん。うん。

安部和音: 別にちゃんとマスにも向けてやってんだよね。

竹林ユウマ: ああ。え、なるほどね。

安部和音: しっかり。うん。

竹林ユウマ: うん。

01:19:38

竹林ユウマ: うん。

安部和音: あの、例えばヘルとタンネルってあるじゃん。

竹林ユウマ: うん。うん。うん。

安部和音: あれ？ヘルの方行ってないんだっけ？あ、あ、そうそうそうそう。

竹林ユウマ: ヘルってあれだよ。あのターンテーブル置いてあるとこね。あ、行った、行っ

た。

安部和音: 行ったな。

竹林ユウマ: うん。

安部和音: あ、あのコントラスト結構面白くて、あのタンネルはオーバーツーリズムが起きるじゃん。

竹林ユウマ: うん。起きるね。

安部和音: うん。でもヘルはわちゃわちゃしてるからさ、どんなやつがララーが来てもさ、いいじゃん。

竹林ユウマ: うん。うん。ヘルはさ、俺行った時ちょっとやっぱ地元の身内の人たちが行く場所なのかなって感じたんだけど、

安部和音: うん。あ、そっか。あ、でも、ま、そう、そうだよ。そう、そう。うん。そこに行くと別に大丈夫だと思う。そこはそもそもわちゃわちゃしてるじゃん、学生集団って。

竹林ユウマ: そこにあの例えば東京から来たら全然知らんグループがいきなり行っても楽しめるもん。うん。なるほどね。あ、あ。うん。

01:20:32

安部和音: さらに APU 生だから、あのサラダボールだから APU ってもうあのかいろんな世界中から集まってきての日本に留学生がだからもう何も気にしないみたいな

竹林ユウマ: うん。ほう。ああ、なるほどね。うん。なるほど。じゃある程度コミュニケーション力がある人が行ったらちゃんと楽しめるっていう。うん。うん。うん。うん。うん。うん。うん。

安部和音: 。そうそうそう。いや、コミュニケーションもしなくても楽しめる。やっぱお酒が美味しくて飲めてでおしゃれでインスタに写真が載せられてそれだけで別に楽しいじゃん。

竹林ユウマ: うん。

安部和音: いや、それだけでいいじゃん。っていうのともチャンネルにその笑笑を女子がいっぱい言っちゃうと、ま、オーバーリズムになるよなとは思うからなんかそこは例えば、ま、ディープってちゃんと

竹林ユウマ: はい。うん。うん。

安部和音: 選んであげた方がいいのかなとか思うし。

竹林ユウマ: うん。うん。うん。うん。うん。

安部和音: で、ツチウムは両方来れるね。ヘルに行くお客さんもタンネルに行くお客さんも両方来ていいような場所になってて、で、両方来ていいような場所っていうのが多い

竹林ユウマ: うーん。

01:21:36

安部和音: かなと思ってる。割と俺が好きなお店が。

竹林ユウマ: うん。なんかざっくりでいいんだけどさ、他になんか例えば掲載するとしたらどんな店があるの？あんな、何だっけ？うわあ、覚えてねえな。

安部和音: うん。ら、あのさ、ラーメン食ったじゃん。ラーメンライフ。あ、ヌードルファクトリーライフ行行った。

竹林ユウマ: え、行行ったっけ？嘘。

安部和音: ここは行行ったの覚えてる。

竹林ユウマ: あ、行行ったわ。行行ったね。行行ったわ。

安部和音: 行行ったし。

竹林ユウマ: うん。

安部和音: なんか変なラーメン出してる。

竹林ユウマ: うん。うん。うん。

安部和音: 変なっていうかなんかすごい正当派のラーメン。

竹林ユウマ: うん。

安部和音: 正当派っちゅうかなんかなんちゅうかよくわからんラーメン。

竹林ユウマ: うん。うん。うん。ま、でも確かにここは別に、ま、洗練されてる感じはあるけど、その配多的な雰囲気はないよね。

安部和音: そう。うん。そうだ。だからこ、こういうお店が多いよ。

01:22:27

安部和音: 俺が入れるマップって全然あ、そうな。

竹林ユウマ: ああ、なるほどね。

安部和音: 多分そのお店のイメージができてないんかもしれんな。佐野さんと竹林君が。

竹林ユウマ: うん。

安部和音: それカルチャーじゃないんだけど。

竹林ユウマ: じゃああれだね、なんか本当にめっちゃカルチャーってわけでもないね、全然。

安部和音: 天手はカルチャーって感じの。

竹林ユウマ: ああ、そういうことね。はいはいはい。

安部和音: だからそのマス向けにやってるんだよ。みんなマス向けにやってんだけど、めちゃくちゃあんな、何て言うんだろうな。

竹林ユウマ: うん。

安部和音: コアがある天手がやってるっていうだけであって話さなくていいんだよ。

竹林ユウマ: うん。うん。なるほどね。

安部和音: で、わちゃわちゃしててもいいんだよ。

竹林ユウマ: はい。はい。あ、理解したわ。

安部和音: うん。

竹林ユウマ: カルチャーのディズニーランドみたいな感じ。

安部和音: そうだね。

竹林ユウマ: うん。

安部和音: 誰でも楽しめるし。

竹林ユウマ: うん。うん。うん。うん。

安部和音: で、なんかここの近くとかにもなんかさ、せ、成人映画とか言ってさ、あの裸の女の人のポスターとかが貼ってある映画

01:23:21

竹林ユウマ: うん。うん。

安部和音: 館みたいな、そう、そう、そう。

竹林ユウマ: ああ、あったね。

安部和音: あるみたいな街なわけよ。

竹林ユウマ: うん。

安部和音: だ、そもそもなんか確式なんてものはないけど綺麗にやりたいよね。

竹林ユウマ: うん。うん。うん。

安部和音: ていう。

竹林ユウマ: うん。うん。うん。じゃあ楽しみ方としては全然そのめっちゃめっちゃ浅いライトな層がそのカルチャーとか全く気にせずお店をなんかプラプラするだけでも全然正解。

安部和音: うん。うん。うん。うん。あれってあの別の旅ってマジ最高だったよね。で、あのマップに書いてあるようなものをなぞるだけですがごく楽しかったよね。

竹林ユウマ: うん。

安部和音: これがカルチャーかってなるみたいな。

竹林ユウマ: ああ。はいはいはいはいはいはい。なるほどね。

安部和音: これがコミュニティかローカルコミュニティかとかこれがカルチャーってやつかってなるみたいな。

竹林ユウマ: うんうん。なるほど。

安部和音: みんななんかうん。

竹林ユウマ: ま、かさんの的にはなんか最初のゴールでゴールとしてそのカルチャーに足を踏み入れて欲しいとかがあるわけではない。うん。うん。はい。はい。はい。

01:24:22

安部和音: うん。うん。うん。別になんか入ってこなくてもいいんだけどいいもんはいいもんだよねっていう。だからまず経済的になんか支援できるできればなって思ってるし、あのいいもん作ってる人たちが潰れないようにね。ま、もう人気点なんだけども、もちろんだけど。

竹林ユウマ: うん。うん。うん。うん。うん。

安部和音: なんかこううん。

竹林ユウマ: あ、分かり。ま、自悲的なね。

安部和音: も、もつとね、うん。入り口がさ、ホテルからの入り口ってのも多分ないと思うん

だよ。

竹林ユウマ: うん。あとペップがあ、確かにね。うん。うん。うん。うん。うん。

安部和音: 飲食店の人たちのお客さんの中でチャンネルがないと思うんだよ。うん。別府だってホテルに泊まった時にホテルから紹介されて飲食店に行くなんてさ、そんな体験ってあんまりないじゃん。うん。だからそれを作りたい。いや、それをやってる人たちがいないからこそなんかあの飲食店からもホテルとして認められるかなって思ってる。

竹林ユウマ: うん。うん。うん。うん。はい。

01:25:25

竹林ユウマ: はい。はい。

安部和音: うん。

竹林ユウマ: なるほど。

安部和音: で、後々2投目以降は1階のフロアとかにカフェとか入れたいんだよ。

竹林ユウマ: うん。うん。うん。うん。

安部和音: で、そこを貸切りで夜はイベントスペースでちょっとクラブっぽい感じにするとかそういうのをやりた。

竹林ユウマ: うん。うん。うん。

安部和音: なんか場所が足りてないって言われたんだよね。けぞさんと喋った時に。

竹林ユウマ: 分かったわ。あれだわ。池尻にある文化会館とかめっちゃ近いんじゃない？あのさ、クリエイティブエージェンシーの世界って知らない？あそこがやってるホテルがあんだけど、ここ結構近いかも

安部和音: なんやそれ？うん。ああ、知ってる。うん。へえ。

竹林ユウマ: しれん。

安部和音: でもなんかさ、それを誰がやるのってなった時にさ、誰がやるんでしょうねみたいな感じなんだよね。俺があんまりやる気ないから。その回すっていうのはさ、ま、そこは、ま、後々なんか健蔵さんがやってくれるのかなと思うんだけど。

竹林ユウマ: うん。

01:26:20

竹林ユウマ: ああ。うん。うん。なるほど。文化会館じゃねえわ。大橋会館だ。のさ、何だっけ？あの中めの戦闘何だっけ？あれ？あ、名前忘れたけどそこ近くにあってさ。

安部和音: うん。なんか見たことある？えっと、あったね。あるね。うん。

竹林ユウマ: そう、1回止まったことあるんだけど、ここも、ま、ここ若干カルチャー色強めでクリエイターが集まる系だけど、そう、なんかそのなんて言うの？1

安部和音: へえ。うん。うん。うん。うん。うん。うん。

竹林ユウマ: 階に飲食店みたいなカフェみたいなのがあって、で、そこにイベントやってて、

で、サウナと客室があって、と、なんかいろんな人が交流

安部和音: え、サウナもあんの？やば。

竹林ユウマ: できる。

安部和音: ふーん。

竹林ユウマ: ライト層からしたらちょっと難しい入るの難しい場所ではあるんだけどそれをも
うちっとライト層に向けてできたら面白い交流が生まれる場所みたいな世界観作れそう。

安部和音: うん。ふん。ふん。ふん。うん。ふん。ふん。

01:27:23

安部和音: ふん。うん。ふん。ふん。サウナやりたいな。

竹林ユウマ: うん。

安部和音: うん。うん。うん。壁はね、言わなくていいと思うな。血に出さていいと思うわ。

竹林ユウマ: さん、ちょ、徐々に分かってきた。うん。ああ、客質との接続ね。なんか無理やり根に合わせなくてもいいかなって思ったんだね。うん。あ、なんかそのビジュアルアイデンティティとしてもあんま言わなくていい気がしててなさあるじゃん。

安部和音: うん。うん。うん。ああ。うん。うん。

竹林ユウマ: シェアホテルもま、これもちろんその他の地域とか地方に展開をさせるっていう前提になるんだけどさ、まあラルな感じじゃん、この。

安部和音: うん。うん。うん。うん。うん。うん。うん。うん。うん。そうね。

竹林ユウマ: でもその各ホテルのサイトとか行くとさ、ちゃんとカラーのアイデンティがあつて、そう、浅草は灰色だったり、函館はちょっと青っぽかったりとか、なんかそう

01:28:28

安部和音: うん。うん。ああ。なるほど。うん。ふん。ふん。ふん。

竹林ユウマ: いう感じでいいんじゃないかな。別がたまたま完璧だったみたいな感じだと思うから。

安部和音: うん。うん。それで1個もま、ベプっていうかこのああ青だったっていう。

竹林ユウマ: うん。うん。うん。ま、第1点本目がね。うん。うん。

安部和音: うん。

竹林ユウマ: うん。なんかそういう横点のさせ方の方がいい気がするな。うん。うん。うん。オッケー。ま、そんな感じか。オッケー。つ行こうかな？俺マジでもいいんだけど。

安部和音: だけでいいかな。うん。いいと思う。ま、そ、しかもそのフードに合わせた色にしていきたいなと思うか。うんうん。かつこよくない？それな。これなんかこの辺本当はボンめっちゃめっちゃめっちゃ開いてるね。

竹林ユウマ: がいい。うん。お盆はお盆別に俺も開いてる。

安部和音: この辺はこの辺かな？やっぱり。

01:29:36

竹林ユウマ: 1920。ああ

安部和音: いや、この2行ぐらい。

竹林ユウマ: 、はいはい。あ、それで言ったら11から14なのかいいな。

安部和音: うん。14。うん

竹林ユウマ: 1821は徐々に忙しくなり始めそうな気配があってうん。

安部和音: 。うん。ああ。はい。はい。はい。

竹林ユウマ: ま、できればあ、だめだ。12、12が予定あるから。

安部和音: あ、でもまあ午前11時だから。あ、そういったね。入ってない。ああ、ちょうどいいかもしれん。それ連絡ないな。

竹林ユウマ: あ、違う。俺がね、予定あんの15は結構がつつり入ってんの。あ、13、14、15とかなんかそこら辺がいいかもな。うん。で、は、力はなんか来れない。うん。いや、あ、俺あったんだけど、なんかその日、あ、その期間予定が結構ちらほうあるらしくて、何日間とか分けられないみたいなの。うん。

安部和音: うん。ああ、まあいいか。じゃあえか。別に1泊2日でもいいけど。歴だけ。うん。

01:30:43

竹林ユウマ: でもうん。ま、もう1回聞いてみるわ。それで行けそうだったら。

安部和音: 1314。一旦借りでいれ。

竹林ユウマ: うん。で、12なん違う、1314とかで別府回って、ま、14の午後とか15でもうちょっとVIのある程度の方向性を出して、で、佐野さん

安部和音: うん。うん。うん。うん。

竹林ユウマ: が多分その翌習ぐらいに多分叩き台みたいなのを持ってくるから、そこでガチちゃんこさせるみたいな感じか。

安部和音: うん。うん。うん。うん。うん。バーベキューとかするか。

竹林ユウマ: うん。いいね。できる場所あんの？あ、マジでできんの？あ、やろうやろ。

安部和音: できる。ダーツ出てきてる。

竹林ユウマ: ちょっと綺麗に。

安部和音: なんか久々に考えて疲れたな。

竹林ユウマ: うん。いや、さ野さんすげえな。頭の回転早すぎね。俺全然追いつけなかったんだけどね。

安部和音: まあ、そのなんか懸念点みたいなののが的確すぎる。しかもなんかじゃあじゃあじゃあどうすればいいかついたら何も言えないからさ。

01:31:49

竹林ユウマ: すげえ。うん。

安部和音: ちょっとじゃあどうすればいいすかね? みたいな感じでなんのよな。

竹林ユウマ: いえ、分かるわ。

安部和音: 出してくれるんかな? え、T サロンとかあるよ。

竹林ユウマ: うん。T サロン。へえ。

安部和音: 何? T サロンンって。へえ。いいなあ。やば。フグのぬか漬け。ホるイカの置き付け。

竹林ユウマ: うん。こういうのがやりたいな。風さんは。

安部和音: いや、え、でも、ま、面白いと思うのはなんかコテコテの輪の中、コテコテのってさ、悪、悪いもんじゃないよねと思う。

竹林ユウマ: うん。うん。

安部和音: すごくそのいいもんがものすごくあるからさ、なんかまほ本当はめっちゃ妄想したんだけどうちの裏山でもうお茶作ってさ、自っちゃとか言ってさ

竹林ユウマ: うん。うん。うん。うん。うん。うん。

安部和音: 、大分の自っちゃとか言って自っちゃっていうジャンルを確立させて全国に流行らせるみたいなのてさ、今だから抹茶茶がめっちゃ売れてんだって。

01:32:48

竹林ユウマ: ああ、いいじゃん。めっちゃいいじゃん。うん。うん。うん。うん。うん。ええ。

安部和音: なんかとマちゃってあるじゃん。

竹林ユウマ: うん。うん。あるね。

安部和音: 千家が7対3ぐらいの割合で洗が多かったのが今3対7ぐらいになったらしいのよ。

竹林ユウマ: うん。逆転したの? ああ、でもそうだね。

安部和音: 抹茶茶が抹茶茶がその7になってでなんでかかって言うと海外が多すぎてそう。

竹林ユウマ: 表三道とかさ、抹茶茶の専門店とか増えてきてるわ。

安部和音: うん。うん。うん。うん。で、それはもう海外需要もあるし、E でも売れるわけじゃん。

竹林ユウマ: うん。

安部和音: だから展開しやすくてで、しかもなんかこう楽しみやすくて日本っぽいじゃん。

しっかりまていうのはまあ正期ではあるよねと思うね。うん。でもさ、日本人の客がさ、じゃあこれをたしめないかつたらさ、めちゃくちゃ楽しいじゃん。

竹林ユウマ: うん。うん。うん。

01:33:40

竹林ユウマ: うん。なるほどね。じゃ、インバウンド向けに展開されたやつに日本人が便乗してると感じるのか。日本人の客が。うん。うん。うん。うん。うん。うん。

安部和音: まあいいよなと思うな。

竹林ユウマ: うん。うん。そうね。

安部和音: そう、そういうのって。

竹林ユウマ: 今まで選択肢に上がってこなかっただけで多分やったんだもんね。

安部和音: そうそうそうそうそうそう。

竹林ユウマ: なるほど。

安部和音: そういったものをこうなんかこうめちゃくちゃ綺麗な形でやるっていうのはやり何かある気がする。

竹林ユウマ: うん。うん。うん。うん。

安部和音: 答えが。

竹林ユウマ: うん。なるほど。

安部和音: うん。

竹林ユウマ: かさん1番やりたわ。そのさ、お金とかさ、場所とかさ、なんかそういう制約を一旦無視して何でもできるってなったらこれやりたいみたいなさ。

安部和音: うん。うん。うん。うん。何でもできるってなった時に何でもできるようになりたいがな。

01:34:30

竹林ユウマ: うん。なるほど。なるほどね。うん。

安部和音: 1番やりたいことなんだよ。言ったじゃん、俺今。だからそのお茶の話したじゃん。マジでお茶始めるみたいなさ、来月からお金があるからできるみたいなとか、お金とか関係性とかがあるからできるとか、誰かに

竹林ユウマ: うん。うん。うん。うん。

安部和音: 相談したら誰かが誰かを連れてきてくれるとか、そういった状態かな。

竹林ユウマ: うん。なるほど。じゃあ開発がやりたいみたいな感じなのかな。

安部和音: ああ、まあでもそうそうだね。新しいことをやっぱりやっていくためにあの人材とお金と人脈があつたらいいかなと思って。

竹林ユウマ: うん。ええ、なるほど。それさんの中のどんな哲学が操作してんの？そのいっぱい色々やりたいとか開発がしたいみたいなのはうんうん

安部和音: うん。やっぱり不安定すぎるからかな。情勢が何かにしがみついたところで依存した瞬間にあれじゃん。その業界が終わったし、終わってしまう可能性もあるし。

竹林ユウマ: うんうんうんうんうんうん。

安部和音: でもハードっていろんなジャンルがあるじゃん。旗でもいいしさ、なんか米作でもいいし。

竹林ユウマ: うん。

01:35:46

安部和音: うん。なんか、ま、その建築やるでもいいし、マンション作るでもいいし、めっちゃいい。

竹林ユウマ: うん。うん。うん。

安部和音: いっぱいあるじゃん。

竹林ユウマ: うん。

安部和音: いっぱいある。は、いっぱいあるハードの何にでも手を出せるような自分になりたいっていうのがある。

竹林ユウマ: うん。うーん。

安部和音: でもそれは何かの哲学でと、あの、筋が通ってる。

竹林ユウマ: うん。うん。うん。うん。

安部和音: だからリッツハウスっていうものを作り上げるためにホテルがあって買取り裁判があってそれでリッツハウスを作ろうと思っててそれが横展開してお茶お

竹林ユウマ: うん。うん。

安部和音: 茶も作れるしみたいなブランドでありたいみたいな感じが面白い時にさやっきゃよかったなっていう後悔がいっぱいあるからさ、なんかやっぱお茶お茶

竹林ユウマ: うん。はい。はい。はい。なるほどね。うーん。

安部和音: っていいと思ってたんだよねとかさ。

竹林ユウマ: うん。なるほどね。

安部和音: そう、なんかの名だけ持って何もできなかったことみたいなのがいっぱいあるから、ま、それで言ったらやっぱ人材人脈お金があればできるわけじゃん

01:36:45

竹林ユウマ: はい。はい。はい。はい。うん。

安部和音: 。

竹林ユウマ: うん。

安部和音: っていう感じかな。

竹林ユウマ: うん。

安部和音: うん。

竹林ユウマ: なるほどね。

安部和音: ま、あとはその物づくりしてる人たちをかなり支援できるわけじゃん。いろんなことができる人って。

竹林ユウマ: ふん。ふん。

安部和音: だ、それが良くない。

竹林ユウマ: うん。ふん。ふ。なるほど。

安部和音: アーティストほどまで行かなくていいけど、なんかいろんなデザインやってて行ける奴らが経済的に成功するってのを手伝えるからさ、何でもブランド立ち上げまくる立ち位っていい

竹林ユウマ: うん。うん。うん。うん。うん。うん。うん。うん。

安部和音: かなと。

竹林ユウマ: なるほど。ま、かさんは何でもいいから仲間と一緒になんかやりたいみたいな感じかね。

安部和音: うん。あ、まあそうだな。

竹林ユウマ: なんか人を絡めてうん。

安部和音: うん。

01:37:38

安部和音: 1人で1人で1人で金稼いで1人でいる意味がもう全く全くわからないな。

竹林ユウマ: なるほどね。うん。

安部和音: 分かる。

竹林ユウマ: あー。いや、俺はね、俺は分かるかも。

安部和音: うん。ああ。

竹林ユウマ: 1人は。

安部和音: 金ま。うん。

竹林ユウマ: いや、なんか1人が好きってよりかは、ま、グループワーク苦手だからそうせざるを得ないみたいな感じ。

安部和音: うん。うん。ああ。ま、でもグループワークじゃなくてさ、物作った後にさ、みんなめっちゃくちゃいいもんできたなって言って酒飲んでる時間みたいなのは良くない? 愚痴じゃなくてさ、作り終えた打ち上げがいっぱいある人生いいなと思ってんだよ。そうそう。

竹林ユウマ: うん。うん。うん。それはめっちゃいいよ。それは理想では。うん。ああ、いいね、それ。確かにね。ま、打ち上げがある人生がいいね。打ち上げはやりたいよ。うん。いや、打ち上げね。俺もさ、別に映像のプロジェクトでさ、あの、打ち上げしましょっ言い始めんの大体俺なんだよ。そうそうそうそう。

安部和音: 打ち上げやりたくない。

01:38:42

安部和音: みんなが納得してる打ち上げやりたくない。うん。うん。あ、そうなんや。言わんのみんな。

竹林ユウマ: 言わないね。すぐ次のプロジェクトみたいな。

安部和音: 人生疲れてんな、みんな。

竹林ユウマ: いや、そうなんだよ。

安部和音: うん。

竹林ユウマ: うん。東京の人間は心がないよ。

安部和音: え、なんかそう。なんかプロジェクトを回していくのっていうのに興味がないかもしれない。そのなんかいろんなあの打ち返しのクライアントワークに全く興味がないかな。

竹林ユウマ: うん。うん。うん。うん。うん。うん。うん。うん。うん。

安部和音: 続いていくことしか始めたくないから今は。

竹林ユウマ: はい。はい。はい。はい。はい。なるほどね。

安部和音: だから、まあなんかプロジェクトのもう作曲とか作曲もう完全にやめたからね。商業音楽家も平業って形にしてもう仕事を受けてないから面白くないもんな。

01:39:44

竹林ユウマ: うーん。はい。はい。はい。はい。

安部和音: なんかうちから知ってる。

竹林ユウマ: ま、面白くはないよな。

安部和音: うん。

竹林ユウマ: うん。

安部和音: でも俺は今回竹橋君と佐野さんはサインしたのはあの毎月払えるようなお金を作りたいなと思って実はやってるんだよね。

竹林ユウマ: うん。うん。うん。うん。うん。

安部和音: やっぱりコンテンツマーケティングみたいなところでお金払えたりだとかなんかイベントやってもらってもいいしなんか毎月き別府に来れるような理由になってもいいしなんかないか

竹林ユウマ: うん。うん。

安部和音: なって思っただ漠然とした感じで呼んではいる。

竹林ユウマ: うーん。まあ、コンテンツマケは多分このコンセプトだとすごい大事な金になるもんね。

安部和音: うん。うん。てかなんかメディアディアっていうところなのかなって思った。

竹林ユウマ: うん。

安部和音: 佐野さんが言ってたメディアをやるっていうことになんか俺が気合を入れないといけないのかなって思った。

竹林ユウマ: うん。うん。うん。うん。

01:40:56

竹林ユウマ: そ、そこで言ってるそのメディアってそ、どういう？ その自分でその情報のウェブメディアやるみたいな話。

安部和音: これ見てこれ。うん。うん。ま、情報のウェブメディアをやるってことなんかな。

ま、インスタだけのアカウントでもいいと思うけど。

竹林ユウマ: うん。うん。うん。ま、何かしらの発信者であるってことだよな。

安部和音: うん。ま、そうそう。

竹林ユウマ: うん。

安部和音: ま、俺は全然やりたくはないんだけど。

竹林ユウマ: なるほど。そうな。

安部和音: うん。ま、ホテルの名前を借りてメディアをやるってのもいいと思うなって思った。

竹林ユウマ: うん。うん。

安部和音: アムアム見てきましたみたいな言ってたけどさすが。ああ、なるほどね。

竹林ユウマ: うん。

安部和音: みたいな。

竹林ユウマ: うん。まあね。うーん。

安部和音: これ見て。これ買い取り再販で。

竹林ユウマ: おお。武陰すげえやん。

安部和音: うん。作った物件。

竹林ユウマ: やば。

01:41:55

竹林ユウマ: すご。近くにいんのは火でうん。

安部和音: いや、これ違うやつ。こいつ紹介するわ。多分仲良くなれると思う。

竹林ユウマ: すげえな。え、いくらで売ってんだっけ？いくらで売るんだっけ？ああ。

安部和音: ん、2500だと思ってたけど、2700にしようかなと思って。これ月々10万円。

竹林ユウマ: ええ、いいね。めっちゃいい家じゃん。

安部和音: で、ここブラックガラスのパントリーになるガラスドアの高さのだ、ガラスドラ3枚みたいなあの、引き、引き違いの。

竹林ユウマ: うん。へえ。はい。はい。はい。すご。壁の材質はどんな感じなの？これ灰色なのはコンクリなの？あ、黒すね。

安部和音: ん、あ、いや、クロス。うん。

竹林ユウマ: うん。ほお。

安部和音: 多分この断色のライトに全部変えられる。全部 iPad であので電コントロールできるようにしてる。これファミリークローゼット。そついてないんだけど、まだめっちゃ広いよ。で、もう

01:43:09

竹林ユウマ: うん。うん。うん。広いな。

安部和音: 1部屋。

竹林ユウマ: 2 L、3 L うん。

安部和音: えっと、2 L K か。うん。そう。あ、で、で、このドアがこれ昔のドア。いや、でもね、なんかね、なんかにまあ大丈夫だなんて感じなんだよね。振り向いた時。そう。元、元の写真送るわ。

竹林ユウマ: めっちゃいいじゃん。ああ。え、コントラストやべえな。そこだけ。うん。意外とマッチしてる。うーん。いいね。うん。

安部和音: あ、元の写真出すわ。どこだ? ビフォーフターのビフォー。これすごくない? これがこれ同じ角度だ。

竹林ユウマ: おわあ、ようやりましたな。すげえな。ええ、やば。うん。え、これリフォーム自体はさ、うん。

安部和音: これぐらいが950万かな。

竹林ユウマ: やば。いくらかったんけ? これリフォーム。ああ。

01:44:49

安部和音: でも950万でやれないからね。これ家立てたらさ、こんな家立てたら34000万するから自分

竹林ユウマ: うん。うん。うん。うん。うん。そっか。900万、月10万。うん。

安部和音: たちであれなんか Bluetooth 遅い時なんない。あ、来た。これこうやって壊して。

竹林ユウマ: やば、廃墟だな。

安部和音: そうそう。だからこのデキがめっちゃめっちゃ良かったからこういう物件いっぱい作れるから内側。

竹林ユウマ: うん。

安部和音: だからこれからってなったら相当リッツハウスのブランド引っ張ってくれるなと思って。

竹林ユウマ: うん。うん。うん。うん。うーん。

安部和音: これとこの事業とホテルやってたらさ、めっちゃかいかつい会社になるなと思って。

竹林ユウマ: うん。確かに。

安部和音: ホテルもそういう感じでやりたいかなって。

竹林ユウマ: ふんふんふんふん。階段エロ。

安部和音: ん、これさ、普通この1段だけのカマチなんだよ。

01:46:14

竹林ユウマ: 階段エロいな。うん。

安部和音: この普通1段だけじゃん。

竹林ユウマ: うん。うん。うん。

安部和音: こ2段にして。こっち土足で入れるシューズクロクにしてて。

竹林ユウマ: ああ、いいね。いいね、それ。

安部和音: そうそうそうなんだよ。

竹林ユウマ: あ、その設計いいな。

安部和音: そうそうそう。これここにここに棚置いて。

竹林ユウマ: あそこに入れんの？ ああ、なんかめっちゃいいやん。

安部和音: ここ土足なんだよ。ここまでリビング。はい。そうなんでケボ置いたりとか、靴めっちゃ置いたりとか、ここベビーカーとか置ける動かせるからっていう感じ。そうなんすよ。うん。うん。うん。

竹林ユウマ: よく考えたな。ああ。うん。うん。うーん。いいね。ブランドのさ、ざっくりイメージとしてはさ、結構リッチな感じにするの。それこそさっきのさ、シェアホテルだとこれさ、な、何て言うんだろう？ ま、行ったらビズハニ系じゃん。

安部和音: ああ。うん。うん。

01:47:16

竹林ユウマ: 水ハにぽスあるやん。なんかちょっとリントしててミニマルであのグリッドレイアウトがしっかりしてて高級感があるみたいなデザインじゃん。

安部和音: うん。うん。うん。うん。うん。うん。

竹林ユウマ: っていう感じのイメージなの。ま、そんなにまだイメージはないって感じ。

安部和音: あ、それリッツハウスのブランドがアムアムはグリッドレイアウトのイメージはあんまりなかったけどグリッドレイアウトはかっこいいとは思うんだけどなんかグリレイアウトのかっこいいだったら結構

竹林ユウマ: えっと、アムアム。うん。

安部和音: かっこいいかなと思うんだけどいでもグリッドレイアウトかなビズハにうんに敵かな。

竹林ユウマ: うん。うん。ふん。ふん。ふん。うん。はい。はい。はい。

安部和音: うん。あ、でもそのなんか選んで選んで引きたいみたいなのかこう業所体みたいな使いたくないなみたいな。

竹林ユウマ: うん。うーん。

安部和音: あ、違う。民体みたいな使いたくないなみたいな。

竹林ユウマ: うーん。ふん。ふん。

01:48:29

竹林ユウマ: ふん。なるほど。

安部和音: うん。ミニマルには落とし込みたい。

竹林ユウマ: ああ、じゃあもうちょいうん。

安部和音: うん。にっただけど、もっとライトでうん。うん。そう、そう、そう、そう。そんなイメージ。うん。

竹林ユウマ: うん。うん。うん。なんかこういうそのミニマルでかっこいいみたいなトーンが残しつつも親しみやすい3スリフみたいなのを使ったブランドイメージ。あー、なるほどね。うん。うん。うん。あれ、前教えてくれたさ、あれな、何だっけ？あのプロゲーマーのアスペル。

安部和音: ステプル。ああ、違う。違う。グッドエスカット。

竹林ユウマ: グいや、あ、あれのね、名前を思い出せなかったね。

安部和音: なんで？ああ、ま、でもアムっていうなんか名前からはね、にはね、色はないかな。

竹林ユウマ: うん。うん。うん。うん。うん。うん。うん。うん。うん。うん。うん。うん。

安部和音: あってもちよいグレーぐらいの白みたいな。

竹林ユウマ: うん。なるほど。

安部和音: うん。

竹林ユウマ: ま、多分それはコンセプト詰めてく段階で、ま、色々見てきそうだな。

安部和音: うん。うん。うん。

竹林ユウマ: オッケー。ま、じゃあとりあえずは1回別府にお邪魔させてもらって、ちょっとそっから考えるわ。

安部和音: そうっすね。

竹林ユウマ: うん。

安部和音: うん。

竹林ユウマ: ま、リサーチはしとくわ。

安部和音: うん。

竹林ユウマ: どんな事例があるか。

安部和音: お願いします。

竹林ユウマ: うん。

安部和音: うん。

竹林ユウマ: オッケー。

01:52:31 より後に文字起こしが終了しました

この編集可能な文字起こしはコンピュータが生成したものであり、誤りが含まれている可能性があります。作成後にテキストを変更することもできます。